築館町文化財調査報告書第17集

伊　治　城　跡

－平成15年度：第29次発掘調査－

平成16年3月

宮城県　築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第 17 集

伊　治　城　跡

－平成 15 年度：第 29 次発掘調査－

平成 16 年 3 月

宮城県　築館町教育委員会

序

築館町には、先人が残した数多くの貴重な文化遺産があります。これらの調査研究と保護・活用に積極的に取り組み、次世代に引き継いでいくことが、現在、生活している我々に課せられた重要な使命であります。

これまでの調査成果により、「伊治城跡」の構造がある程度解明されたことから、平成７年度から史跡指定の準備を進めてきました。念願がかない平成１５年８月２７日に「伊治城跡」が国史跡として指定されました。今回指定された区域は、政庁を中心とした内郭を含む 93,581.47 ㎡で、伊治城跡の南東部分にあたります。

「幻の城柵」として昭和５２年に宮城県多賀城跡調査研究所が発掘調査を実施して以来、実に２６年の歳月がすぎました。発掘調査開始当初は、伊治城の建物跡など主要な遺構が確認できませんでしたが、平成２年に建物群を検出し、平成３年には伊治城の中枢部である政庁跡を検出することができました。

また、我が国で初めて古代の弓の一種である弩の一部「機」が発見されました。弩は最新の兵器として文献に散見しておりましたが、この発見で改めて伊治城の重要性及び律令政府と蝦夷の緊張した地域であったことが裏付けられました。

これもひとえに、発掘調査に土地を協力していただきました城生野地区住民の方々をはじめ、調査に指導・協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課には深く感謝申し上げます。

平成１６年３月

久我 竹五郎

例　　言

1　本書は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する伊治城跡の平成１５年度発掘調査（第２９次調査）の成果をまとめたものである。

2　調査は、国庫補助事業にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。

3　調査時における地区割りは、城生野分館前の伊治城跡「原点１」を基準点（０．０）とし、この点と「原点２」と結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は、２°７′９″西偏する。基準点の座標値（第Ｘ系）は以下のとおりである。

原点１　Ｘ＝－136,867.547　　Ｙ＝17,758.857(世界測地系－TKY2JGDにより変換)

原点２　Ｘ＝－136,864.350　　Ｙ＝17,845.295(世界測地系－TKY2JGDにより変換)

平面図中の地区割り：Ｓ－２０、Ｅ－２０などの表記は、それぞれの基準点から南に２０ｍ、東に２０ｍの位置にあることを示している。

4　本遺跡の位置を示した地形図（第２図）は、国土交通省国土地理院発行の１／25,000の地形図「金成」、「築館」を使用して作製した。

5　土色の記載は「新版標準土色帳」（1973）にもとづいた。

6　本書の作成は築館町教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課が担当し、担当者の協議を経て、千葉長彦、三浦実、佐藤憲幸が編集・執筆した。

7　発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。

東北大学総合博物館教授　柳田俊雄氏

東北学院大学教授　佐川正敏氏

8　旧石器の石材については須田富士子氏（東北大学東アジア研究センター火山科学講座研究生）に同定していただいた。

9　本遺跡では、遺構に種類ごとの略号と検出順の番号を付している。種類ごとの略号は以下のとおりである。

建物跡＝ＳＢ、竪穴住居跡、竪穴遺構＝ＳＩ、土取り穴など＝ＳＸ、溝＝ＳＤ、土壙＝ＳＫ

10　土師器については、製作にロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、使用していないものを「非ロクロ調整」と呼ぶこととした。

11　発掘調査の記録や出土品は築館町教育委員会が一括して保管している。

12　なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書（１７冊）については、本文の後の付表１にまとめて示している。

目　　次

序
例言
目次・調査要項
Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境・・・

Ⅰ．遺跡の位置と地理的環境

伊治城跡は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形をみると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山地が南北に走り、中央部を北上川が南流している。西側の奥羽山地は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの丘陵に分岐している。そのうち、最も北側にある築館丘陵は江合川と迫川に挟まれており、丘陵端部ではさらに多くの小丘陵に分かれている。

遺跡は標高 20 ～ 28 mほどの小丘陵東端部に続く河川段丘に立地しており、北側は二迫川、南側から東側にかけては迫川、西側は北から入り込む沢によって画されている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果や地形から、おおよそ東西 700 m、南北 900 mほどと考えられる（第２図）。

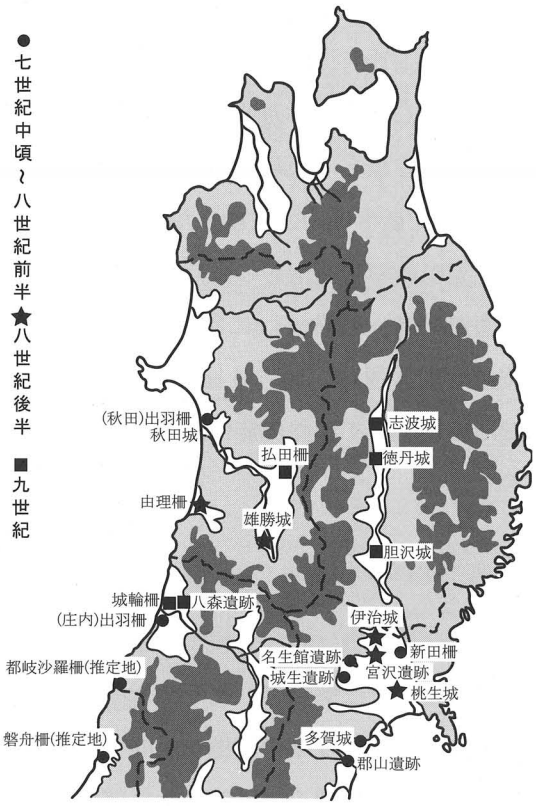
Ⅱ．遺跡の概要

伊治城は、８世紀後半から９世紀初頭にかけて律令政府が東北地方経営のために設置した城柵の一つである。奈良・平安時代の政治・軍事の中心地である陸奥国府多賀城と、平安時代に鎮守府が置かれた胆沢城とのほぼ中間に位置している（第１図）。

また、桃生城と共に設置年代が明らかな城柵として重要で、その所在地については多くの論考があり、本地区も有力な擬定地の一つであった。この間の詳しい研究史については、「伊治城跡Ⅰ」（宮城県多賀城跡調査研究所 1978）を参照していただきたい。

昭和 52 年から３年間にわたる宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査や、昭和 62 年からの築館町教育委員会・宮城県教育委員会による発掘調査で、本遺跡が伊治城跡であることが明らかとなった（付表１）。すなわち、土塁と大溝による外郭区画施設を周囲に巡らし、その内部の南に偏った部分に東西約 185 m、南北約 245 mの平行四辺形に築地塀で区画したとみられる内郭を配していること、内郭の中央に東西 55 m、南北 60 mの方形に築地塀を巡らせた政庁が存在することが明らかになった。

政庁には正殿を中心として脇殿や後殿、前殿などが配置されている。これらの建物群は大別して３時期の変遷があり、２時期目は火災にあってい



図版１　東日本の古代城柵（進藤 1991 に一部加筆）

る。内郭は建物を主体とした官衙ブロックが設けられ、とくに北西部は、創建期に桁行き５間の建物６棟以上が南に開く「コ」字型配置をとっている。外郭は、施設の違いから内郭北辺を境に２分され、南は建物・竪穴建物・竪穴住居などで構成される官衙域であり、北の伊治城全体からみて 2/3 以上を占める北部は、竪穴住居を主体とする住居域として利用されていた、と考えられる（第３図）。

遺物で特筆されるものとしては、日本ではじめて弓の一種である「弩」の一部「機」が出土した（第 25 次調査）。

Ⅲ．遺跡周辺の歴史的環境（第２図）

このことについては、「伊治城跡・嘉倉貝塚」（築館町教委 :2003）で詳述しており、参照していただきたい。以下では伊治城と同時代の奈良・平安時代の周辺の遺跡を概観する。

北方約 6km の丘陵上には、蕨手刀などが発見された、33 基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群がある（東北学院大学考古研 :1972）。また、伊治城から約２㎞北には大沢横穴墓群や姉歯横穴墓群があり、伊治城を含む周辺一帯の支配者層の墓と考えられる。北方３㎞には『吾妻鑑』に登場する栗原寺跡と推定されている地点があり、古代末の遺構・［出土遺物］未確認ながらも、10 世紀前半頃の池跡や（東理 :1996）平安時代中期以降の礎石建物跡（栗原寺調査団 :1963）が発見されており、付近からは仏像が見つかっている。

発掘調査された集落跡には、築館町佐内屋敷遺跡（森 :1983）、原田遺跡（阿部 :1980）、嘉倉貝塚（佐藤 :2003）、志波姫町御駒堂遺跡（小井川・小川 :1982）、宇南遺跡（遊佐 :1980）、大門遺跡（真山 :1980）、糠塚遺跡（小井川・手塚 :1978）、金成町佐野遺跡（平沢・手塚 :1980）、栗駒町長者原遺跡（三好 :1995）などがある。このうち、糠塚遺跡は東方５㎞にあり、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式土器の基準資料となっている。一方、南方 2.5 ㎞にある御駒堂遺跡では、奈良・平安時代の遺構・遺物の他に、8 世紀前半頃の関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や住居が発見されており、伊治城成立以前の栗原地方の動向を考える上で注目される。

生産遺跡では、西方４㎞にある須恵器を焼いた築館町岩ノ沢窯跡や東方４㎞にある須恵器を焼いた志波姫町狐塚遺跡、北方６㎞にある須恵器や瓦を焼いた金成町小迫神社窯跡があげられ、製品が伊治城に供給されていた可能性が考えられる。

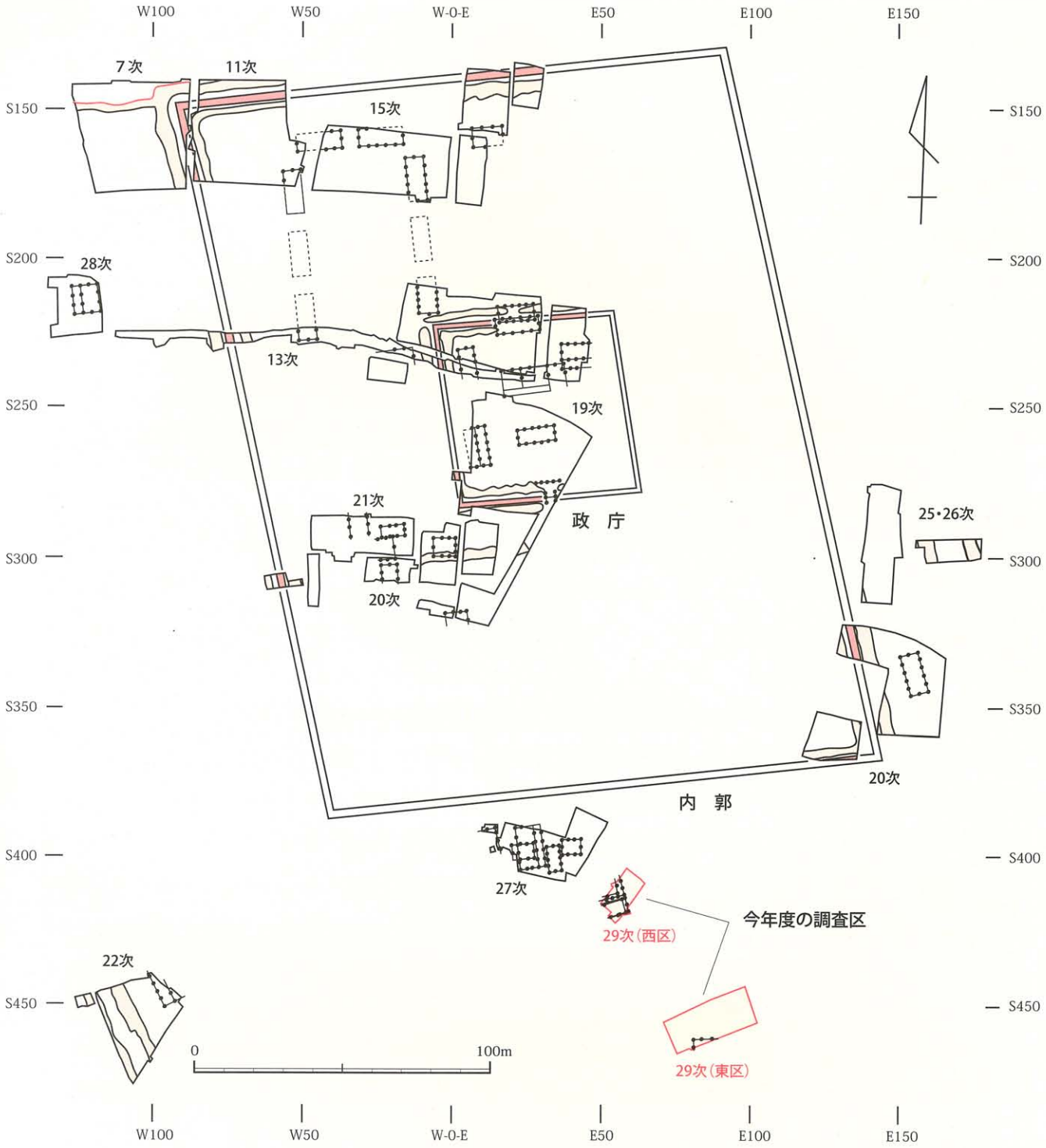
Ⅳ．調査の目的（第３図）

伊治城の発掘調査は政庁の検出を主眼に実施されてきたが、平成３・４年度の調査で政庁の規模や建物配置などがほぼ解明されたため、平成５年度以降からは内郭と外郭の区画施設および両地区の官衙ブロックの構造と変遷の把握を目的に調査を実施している。

今年度は第２７次調査で確認した外郭南東部の官衙施設の遺構の広がりと、これまで未調査であった台地縁辺部に想定される外郭南辺区画施設の解明を目的として、調査区を２ヶ所に設定し調査を実施した。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	伊治城跡	城柵跡	旧石器・古墳・奈良・平安	12	小山遺跡	散布地	縄文・古代	23	刈敷治郎遺跡	散布地	縄文中、晩・古代
2	栗原寺跡	寺院	古代・中世	13	高田山遺跡	散布地	縄文・古代	24	刈敷袋遺跡	散布地	縄文・古代
3	尾松遺跡	散布地	古代	14	原田遺跡	集落	縄文中・古代	25	糠塚遺跡	集落	弥生・奈良・平安
4	長者原遺跡	集落	古墳前、中・古代	15	下萩沢遺跡	集落	縄文・古代	26	大門遺跡	集落	縄文・奈良・平安・中世
5	大仏山古墳群	円墳	古墳後	16	源光遺跡	円墳	古墳	27	狐塚遺跡	窯跡	古代
6	姉歯横穴墓群	横穴墓	古墳後	17	佐内屋敷遺跡	集落	縄文・奈良・平安	28	熊谷遺跡	集落	縄文・古代
7	佐野遺跡	集落	弥生・古代	18	木戸遺跡	集落	縄文中・古代	29	鶴ノ丸館遺跡	集落・城館	縄文晩・弥生～近世
8	大沢横穴墓群	横穴墓	古墳後・古代	19	鰻沢遺跡	集落	縄文後・古代・中世	30	吹付遺跡	集落	古代
9	堀切長根遺跡	散布地	縄文・古代	20	照越台遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	31	宇南遺跡	集落・城館	縄文前・晩・弥生～近世
10	甚内屋敷遺跡	散布地	縄文・古代	21	玉萩台遺跡	散布地	縄文中～晩・古代	32	御駒堂遺跡	集落	縄文～近世
11	浦ノ沢遺跡	散布地	古代	22	嘉倉貝塚	貝塚・集落	縄文前～弥生・古代	33	上ノ山遺跡	集落	縄文・古代

図版２　伊治城跡と周辺の遺跡


W100
W50
W-0-E
E50
E100
E150
S150
S200
S250
S300
S350
S400
S450
7次
11次
15次
28次
13次
19次
21次
20次
政 庁
25・26次
20次
内 郭
27次
29次（西区）
今年度の調査区
22次
29次（東区）
0
100m

図版３　調査区の位置

図版４　調査区空中写真　　上：西区　下：東区

Ⅴ．基本層序

層の堆積状況を確認するため、東調査区南辺と北東隅（旧石器調査区 01 区）にサブトレンチを設けた。Ⅰ～Ⅷ層まで確認し、各層の特徴は以下に示しているとおりである。

［西区］Ⅲ～Ⅶ層が削平を受けており、東区と同様、Ⅷ層が古代の遺構確認面である。

［東区］南辺トレンチではⅠ～Ⅳ・Ⅷ層、北東隅トレンチではⅠ・Ⅱ・Ⅴ～Ⅷ層が確認できた。なお、旧石器が出土した調査区東端部以外ではⅤ～Ⅶ層が削平を受けており、Ⅷ層が古代の遺構確認面である。調査区東端部では、Ⅴ～Ⅷ層が北東方向に緩やかに傾斜しており、Ⅴ層は漸移層と考えられ、Ⅵ層は図版 15 で示しているラインから北東方向に向かって徐々に厚く堆積する状況が確認できた。

層位	土　色	土　性	特　徴
Ⅰ	表土及び水田耕作土		
Ⅱ	黒褐色（10YR2/2）	シルト	調査区全体で確認できる。層厚 10 ～ 20cm
Ⅲ	黒褐色（10YR3/2）	シルト	灰白色火山灰大ブロックを含む
Ⅳ	暗褐色（10YR3/3）	シルト	焼土、炭化物粒少量含む
Ⅴ	暗褐色（10YR3/4）	シルト	Ⅵ層への漸移層。旧石器を一部含む。層厚 5 ～ 20cm。
Ⅵ	褐色（7.5YR4/6）	粘土質シルト	マンガンを少量含む。径 5 ～ 10 ㎜の礫を少量含む。 旧石器の主たる包含層である。層厚 10 ～ 30cm。
Ⅶ	明褐色（7.5YR5/6）	粘土質シルト	マンガンを多く含む。径 10 ～ 15 ㎜の礫が均質に含まれる。 径 1 ～ 3 ㎜の赤色の粒子をごくわずかに含む。 しまりが非常に強い。層厚は 15 ～ 20cm。
Ⅷ	明褐色（7.5YR5/8）	砂質シルト	径 10 ～ 20 ㎜の礫を多量に含む。しまりが非常に強い。 東調査区東端部以外では削平により、 本層上面が古代遺構の確認面となっている。

Ⅵ．古代

（1）発見された遺構と遺物

【西区】（図版５）

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡４棟以上、土壙３基、溝跡３条などである。遺物については、掘立柱建物の柱穴、土壙などの確認面から、土師器・須恵器・平瓦などが整理用コンテナで１箱出土している。以下、精査をおこなった掘立柱建物跡について説明し、土壙、溝跡については一覧表で記すこととする。（表１・２）

①　掘立柱建物跡

４棟以上検出した。すべて調査区外に展開しており建物規模の全容が分かるものはない。

【ＳＢ 612 】

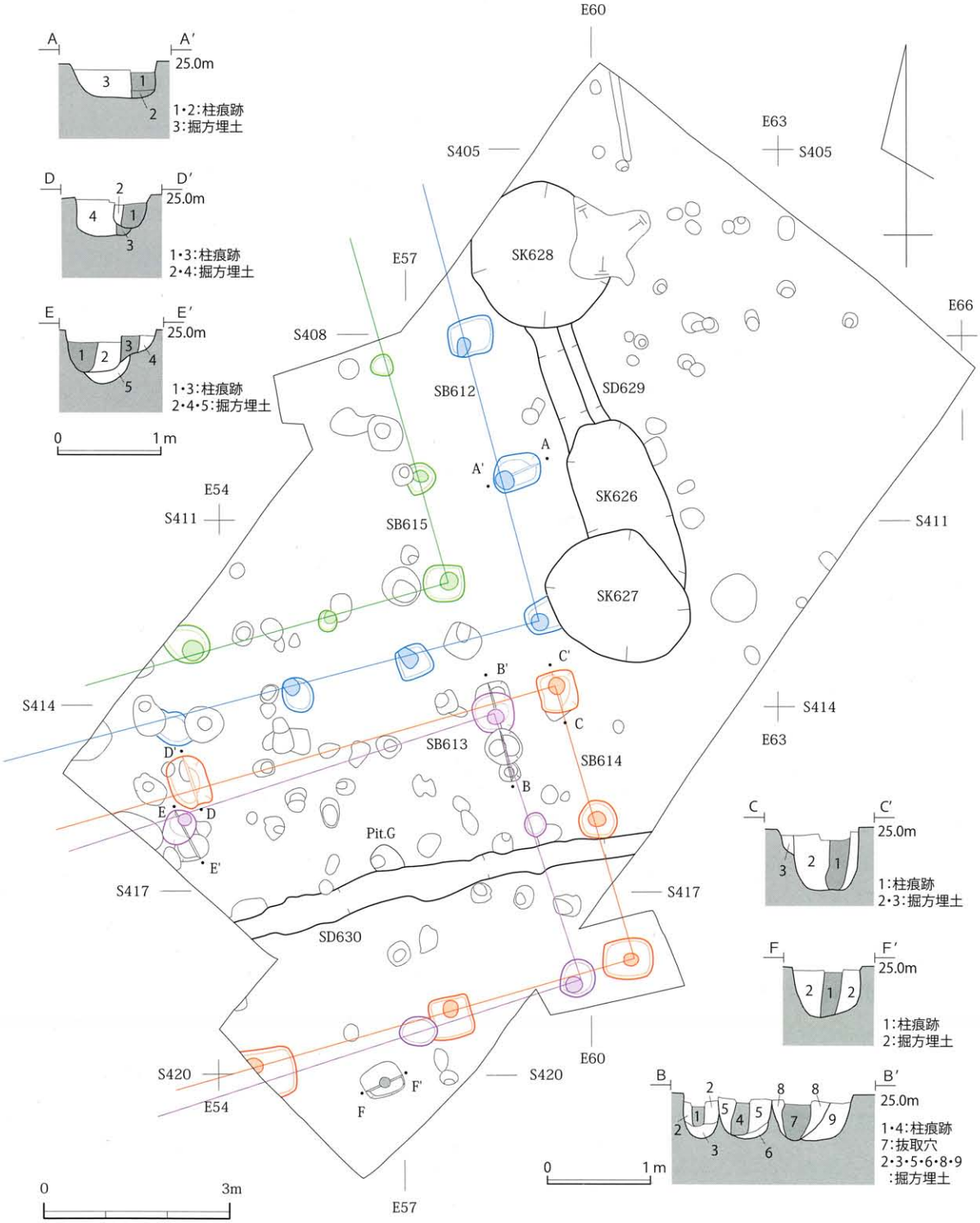
Ⅷ層上面で検出した南北３間以上、東西３間以上の建物跡である。ＳＫ 627 と重複し、これより古い。また、ＳＢ 615 と重複するが、柱穴が重複しておらず、新旧関係は不明である。柱穴は６個所で検出し、４個所で柱痕跡、２個所で柱抜取穴を確認している。

平面規模は、東側柱列で総長が 4.6 m以上、柱間寸法が南から 2.4m･2.2 m、南側柱列で総長が 6.4

m以上、柱間寸法が東から 2.2 m・2.0 m・約 2.2 mである。方向は東側柱列で測るとN－16°－Wである。

柱痕跡は径約 25cm で、堆積土は炭化物、焼土を含む暗褐色土である。柱穴は長辺約 60 ～ 80cm、短辺約 45 ～ 60cm の方形もしくは長方形で、深さは東側柱列の南から２番目の柱穴で約 36cm である。柱穴埋土は、地山ブロックを多く含む、黒褐色土である。

［出土遺物］出土していない。



図版５　西調査区検出遺構

【ＳＢ 613】

Ⅷ層上面で検出した東西２間以上、南北２間の建物跡である。ＳＢ 614、ＳＤ 630 等と重複し、ＳＢ 614 より新しい。ＳＤ 630 との新旧関係は不明である。柱穴は５個所で検出しており、４個所で柱痕跡、１個所で柱抜取穴を確認している。

平面規模は、北側柱列で総長 5.3m 以上、柱間寸法は南側柱列で約 2.6m。東妻で総長 4.5m、柱間寸法は北から約 1.9 m・約 2.6m である。方向は南側柱列でＥ－ 17°－Ｎである。

柱痕跡は径約 30cm で、堆積土は地山粒を含む暗褐色土である。柱穴は一辺約 0.6 mの方形や径約 0.3 ～ 0.6 mの円形で、深さは約 0.4 mである。柱穴埋土は、地山ブロック、炭化物を含む暗褐色土である。

［出土遺物］出土していない。

【ＳＢ 614】

Ⅷ層上面で検出した東西３間以上、南北２間の東西棟建物跡である。ＳＢ 613、ＳＤ 630 等と重複し、ＳＢ 613 より古い。ＳＤ 630 との新旧関係は不明である。柱穴は６個所で検出しており、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。

平面規模は、南側柱列で総長 6.4m 以上、柱間寸法は東から 3.1m・3.3m。東妻で総長 4.6m、柱間寸法は 2.3m 等間である。方向は南側柱列でＥ－ 16°－Ｎである。

柱痕跡は径約 20cm で、堆積土は地山粒を含む黒褐色土である。柱穴は長辺約 0.6 ～ 0.8 m、短辺約 06. ～ 0.8cm の方形もしくは長方形、あるいは径約 0.6 mの円形で、深さは約 0.6 mである。柱穴埋土は、地山ブロック、炭化物、焼土を含む黒褐色土である。

［出土遺物］出土していない。

【ＳＢ 615】

Ⅷ層上面で検出した南北２間以上、東西２間以上の建物跡である。ＳＢ 612 等と重複するが、新旧関係は不明である。柱穴は５個所で検出し、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。

平面規模は東側柱列で総長3.7m以上、柱間寸法は南から1.8m・約1.9m、南側柱列で総長4.3m以上、柱間寸法は東から 2.0 m・2.3m である。方向は南側柱列で測るとＮ－ 15°－Ｗである。柱穴は一辺 30 ～ 70cm の隅丸方形で、深さは断ち割りを行っていないので不明である。柱穴埋土は、炭化物、焼土、地山ブロックを含む黒褐色土である。

［出土遺物］出土していない。

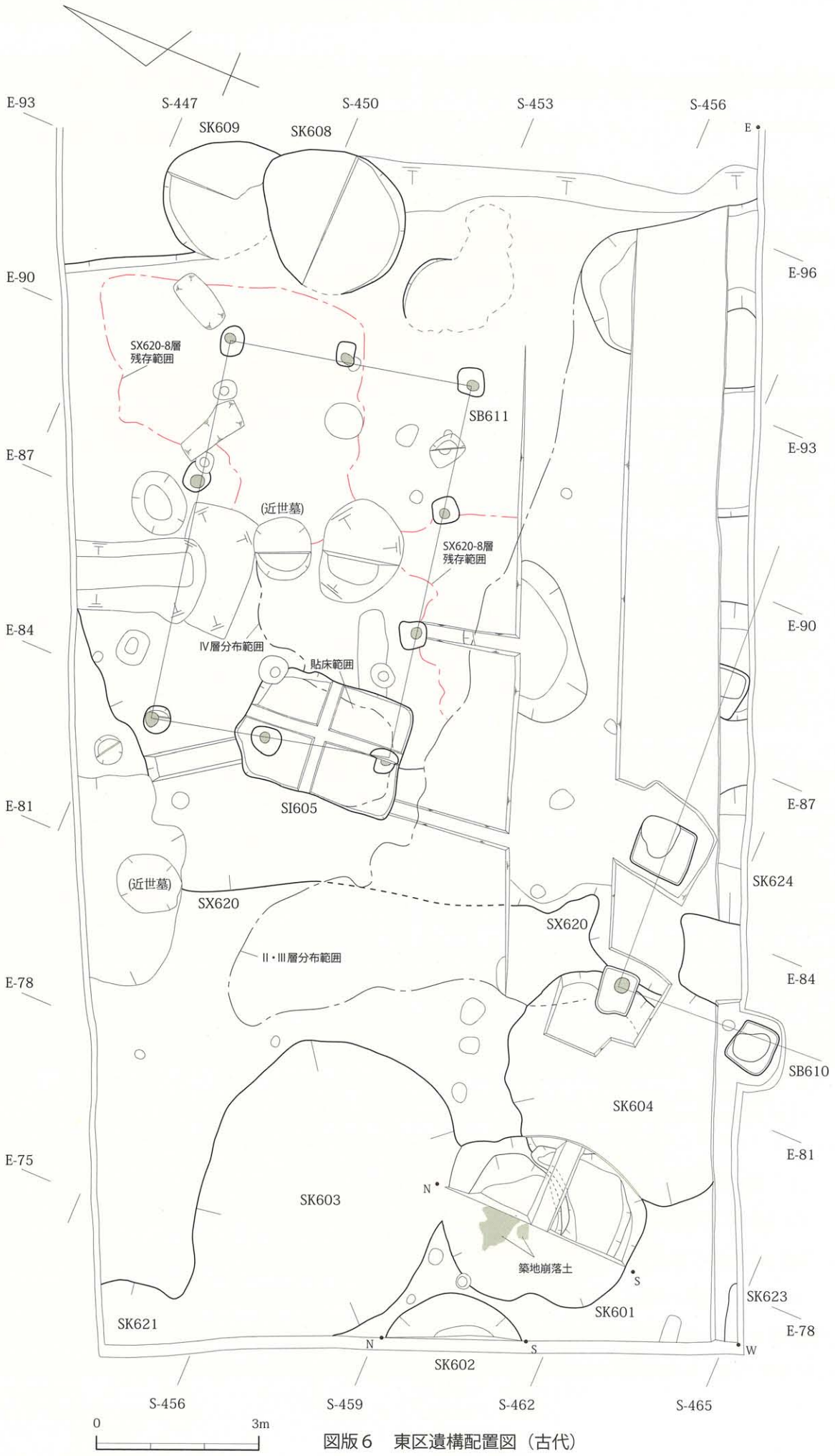
②　土壙・溝跡

表１　土壙一覧表

遺構名	形　状	規　模（長軸 × 短軸）	重　複	備考
SK626	長楕円形	3.0×1.4	SD629A・Ｂより新しく SK627 より古い	炭化物，焼土を多く含む黒褐色土
SK627	楕円形	2.3×2.0	SB612・SK626 より新しい	炭化物，焼土を多く含む黒褐色土
SK628	円形	2.4	SD629 より新しい	炭化物，焼土を多く含む黒褐色土

表２　溝跡一覧表

遺構名	方向	規　模	重　複	備考
SD629A	南北	幅 30 ㎝以上　長さ 1.7m以上	SD629B，SK626，628 より古い	黒褐色土　炭化物、焼土多量含む、地山粒含む
SD629B	南北	幅 45 ㎝　長さ 1.7m以上	SD629A より新しく，SK626，628 より古い	黒褐色土　地山粒含む。
SD630	東西	幅 35 ～ 60 ㎝　長さ 6.6m以上		黒褐色土　炭化物，焼土を含む。



図版６　東区遺構配置図（古代）

【東区】（図版６）

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡２棟、竪穴遺構１基、土壙10基以上、整地地業１個所があり、遺物については、掘立柱建物の柱穴、土壙の確認面などから、土師器・須恵器・丸瓦・平瓦などが整理用コンテナで９箱出土している。以下、主に精査をおこなった遺構について説明し、平面確認のみの土壙については一覧表で記す。（表３）

①掘立柱建物跡

【ＳＢ６１０】（図版７）

調査区南端のⅧ層上面及びSX620堆積土第１層上面、ＳＫ604堆積土上面で検出した東西２間以上、南北１間以上の建物跡である。ＳＫ604・ＳＸ620と重複し、これより新しい。柱穴は４個所で検出しており、すべての柱穴で柱抜取穴、１個所で柱痕跡を確認している。

平面規模は、北側柱列で総長6.0m以上、柱間寸法は３ｍ等間と推定される。西側柱列で約2.7m以上である。方向は北側柱列でＥ－６°－Ｎである。

柱痕跡は径約30cmで、堆積土は炭化物を含む暗褐色土である。柱穴は長辺約0.8～1.1ｍ、短辺約0.6～1.1cmの方形もしくは長方形で、深さは断ち割りを部分的にとどめている為不明である。柱穴埋土は、地山ブロック、炭化物、焼土を含む暗褐色土である。

［出土遺物］柱抜取穴から非ロクロ調整の土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、平瓦の小破片が少量出土している。須恵器坏の切離し技法は回転糸切りである。

【ＳＢ611】

調査区中央のⅧ層上面及びＳＩ605堆積土上面で検出した、桁行３間、梁行２間の東西棟建物跡である。ＳＩ605と重複し、これより新しい。柱穴は９個所で検出しており、６個所で柱痕跡、３個所で柱抜取穴を確認している。

平面規模は、桁行が南側柱列で総長約7.1m、柱間寸法が東から2.5m・2.2ｍ・2.4ｍ、梁行が西妻で総長4.4m、柱間寸法が北から2.1ｍ・2.3ｍである。方向は北側柱列でＥ－13°－Ｎである。

柱痕跡は径約20cmで、堆積土は暗褐色土である。柱穴は長辺約0.4～0.6ｍ、短辺約0.3～0.5ｍの方形もしくは径約0.3～0.5ｍの円形で、深さは北西隅柱穴で約0.3ｍである。柱穴埋土は、地山ブロックを多く含む黒色土である。

［出土遺物］柱穴確認面から、非ロクロ調整の土師器甕、須恵器甕、丸瓦の小破片が少量出土している。

②　竪穴遺構

【ＳＩ605】（図版８）

調査区中央のⅧ層上面及び基本層位第Ⅳ層上面で検出した。ＳＢ611と重複し、これより古い。平面形は長辺約3.0ｍ、短辺約2.2ｍの隅丸長方形である。底面はほぼ平坦で、南側の一部を除き黒褐色土を含む地山起源の黄褐色土で貼床されている。壁はやや急に立ち上がっており、深さは約13cmである。堆積土は、地山ブロックを含む黒褐色土で埋め戻されている。

図版７　SB610 掘立柱建物跡　1：SB611(西から) 2：N2W1 柱穴　3：N1W1 抜取穴断面　4：N1W1 柱穴　5：N1W2 抜取穴断面　6：N1W2 柱穴

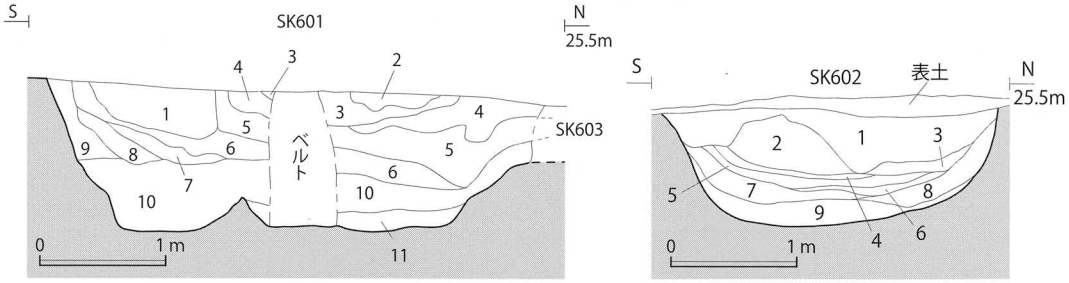
［出土遺物］埋土から須恵器小破片が少量出土している。

③　土壙

大小合わせると 10 基以上を検出した。多くは平面形が不整な円形ないしは楕円形を基調とする長辺 2.5 m以上の大形の土壙である。これらのうち、調査区の西側で確認したＳＫ 601 ～ 604・621 土壙については、ＳＫ 601・602 の堆積土中に築地塀の積土と考えられる版築状のブロックが認められることや、以下で述べる通り、ほぼ同時期に掘り込まれ、その後、一部埋め戻されたと考えられ

図版８　SI605 竪穴遺構、SK601・602 土壙

1：SI605　2：SK601　3：SK601 南側断面
4：SK601 北側断面　5：SK601 東側断面　6：SK601 築地崩落土
7：SK601 崩落土断面　8：SK602 断面



層位	土　色	土　性	特　徴
1	暗褐色（10YR3/4）	シルト	築地崩壊土
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	築地崩壊土
3	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭粒及び礫を含む
4	褐　色（10YR4/6）	シルト	地山ブロックを含む
5	褐　色（10YR4/6）	シルト	
6	暗褐色（10YR3/4）	シルト	炭化物と小礫をわずかに含む
7	明褐色（7.5YR5/8）	シルト	小礫をわずか含む
8	褐　色（10YR4/4）	シルト	
9	明褐色（7.5YR5/8）	シルト	
10	褐　色（10YR4/4）	シルト	暗褐色シルトを多量に含む
11	黒褐色（10YR2/3）	シルト	地山ブロックをやや多く含む。

層位	土　色	土　性	特　徴
1	褐　色（7.5YR4/3）	シルト	炭化物と地山ブロックを含む
2	暗褐色（10YR3/4）	シルト	黄褐色土と版築状、築地崩壊土
3	暗褐色（10YR3/3）	シルト	
4	暗褐色（10YR3/4）	シルト	
5	褐　色（10YR4/6）	シルト	地山ブロックを含む
6	褐　色（7.5YR4/4）	シルト	焼土粒を含む
7	暗褐色（10YR3/4）	シルト	地山ブロックを含む
8	褐　色（10YR4/6）	シルト	炭化物粒、地山ブロックを含む
9	褐　色（10YR4/6）	シルト	上面に薄い炭化物層

図版９　SK601・602 土壙

表３　土壙一覧表

遺構名	形状	規模（長軸 × 短軸）	備考（重複・堆積土等）
SK601	不整円形	3.8m×3.3m	炭化物，地山ブロックを含む暗褐色土
SK602	円形？	2.5m以上	炭化物，地山ブロックを含む褐色土
SK603	楕円形	6.0m×4.4m	暗褐色土
SK604	円形	4.6m	炭化物，地山粒を少量含む暗褐色土
SK608	円形	2.5m	炭化物を含む暗褐色土
SK609	楕円形？	2.5m？	炭化物を含む暗褐色土
SK621	不明		地山ブロックを含む黒褐色土
SK623	不明		地山ブロックを含む黒褐色土

ることから、築地塀構築時の土取り穴と考えられるものである。

精査したのはＳＫ601･602･609等で、ＳＫ603･604･621は平面確認のみにとどめている。（表３）

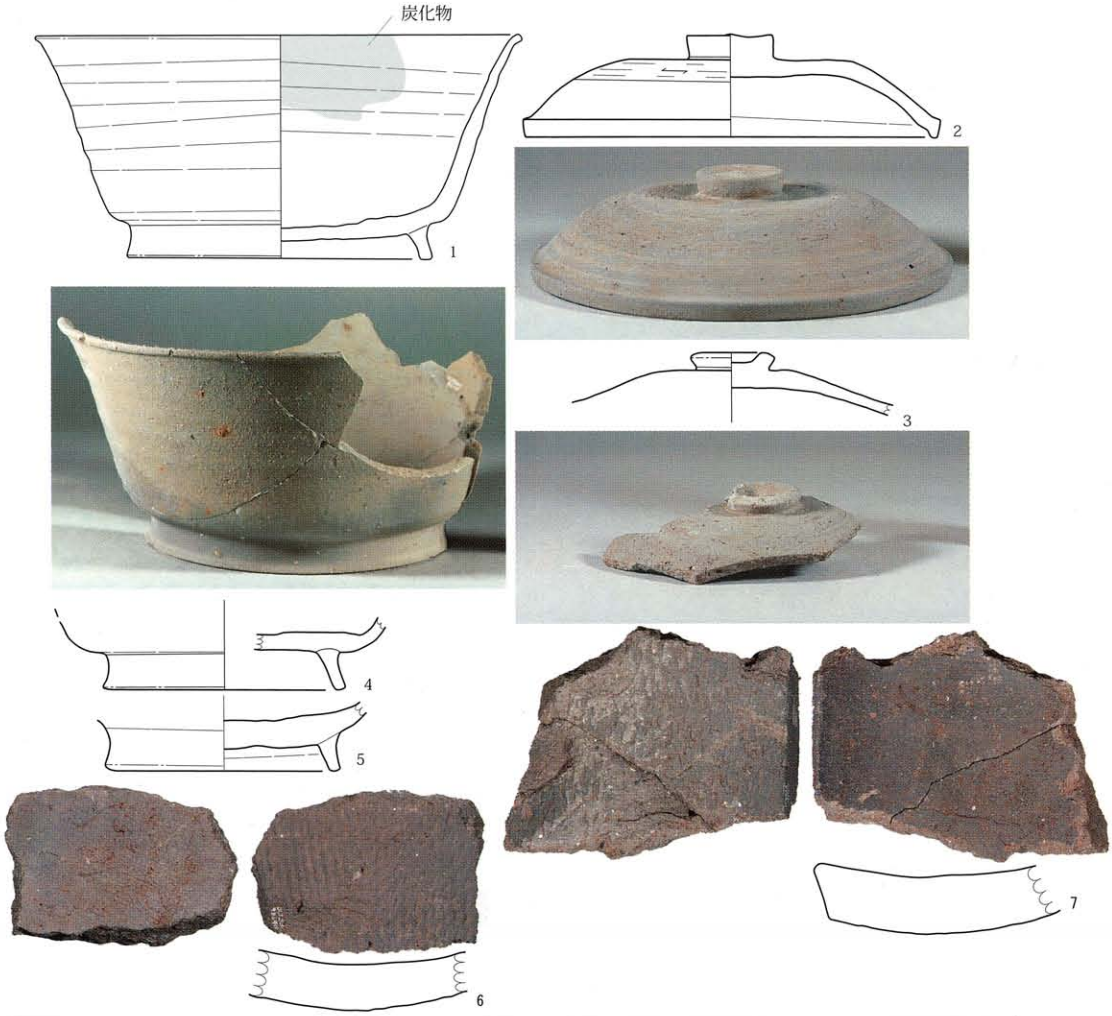
【ＳＫ601】（図版８・９）

調査区西側のⅧ層上面で検出した。ＳＫ603・604と重複するが、同時に埋め戻されており、新旧関係は認められない（図版９）。規模・平面形は長辺約3.7 m、短辺約3.3 mの楕円形である。底面には凹凸があり、壁は南側で急に立ち上がっている。深さは約1.5 mである。堆積土は11層に分けられ、ＳＫ603・604にのびている。第１～10層が人為的埋土、最下層の第11層が自然堆積土と考えられる。また、南北の断面にはかからなかったが、第11層上面にはＳＸ620第６層に相当する、薄い炭化物層が認められる。第１・２層は版築状のブロックが認められ、築地の積土の塊と推定されるものである。

［出土遺物］堆積土から平瓦などが出土している。

【ＳＫ602】（図版８・９）

調査区西端のⅧ層上面で東半のみを検出した。重複は認められない。規模・平面形は長辺2.5 m以上、短辺0.8 m以上の楕円形ないしは径2.5 m以上の円形と考えられる。底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がっている。深さは約0.8 mである。堆積土は９層に分けられ、第１～８層が人為的埋土、最下層の第９層が自然堆積土と考えられる。また、第９層上面には薄い炭化物層が認められる。第２



No.	種　別	出土遺構	特　徴	口径	底径	器高
1	須恵器　高台付坏	SK609 堆積土	内面：ロクロナデ　外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り	19.1	12.7	9.0
2	須恵器　蓋	SK609 堆積土	内面：ロクロナデ外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り	16.4		4.1
3	須恵器　蓋	SK609 堆積土	内面：ロクロナデ外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り			
4	須恵器　高台付坏	SK609 堆積土	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り		10.5	
5	須恵器　高台付坏	SK609 堆積土	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り		9.3	
6	平瓦	SK604 堆積土	凹面：布目→ナデ　凸面：縄叩き			
7	平瓦	SK609 堆積土	凹面：布目→ナデ　凸面：縄叩き　側縁：ケズリ			

図版 10　土壙出土遺物

層は版築状のブロックが認められ、築地の積土の塊と推定されるものである。

［出土遺物］出土していない。

【ＳＫ 608】

調査区東側のⅧ層上面で検出した。ＳＫ 609 と重複しこれより新しい。規模・平面形は径約 2.5 mの不整円形である。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっており、深さは約 0.4 mである。堆積土は 1 層で、しまりのない暗褐色土である。

［出土遺物］出土していない。

【ＳＫ 609】

調査区東側のⅧ層上面で検出した。ＳＫ 608 と重複しこれより古い。規模・平面形は径約 2.5 m の不整円形と考えられるが残存不良のため詳細は不明である。底面にはやや凹凸があり、壁はやや急にに立ち上がっている。深さは約 0.1 mである。堆積土は 1 層で、しまりのない暗褐色土である。

［出土遺物］堆積土中から非ロクロ調整の土師器甕、ロクロ調整の土師器坏、須恵器高台付坏・蓋・甕、平瓦などが出土している（図版 10）。小破片のため図示できなかったが土師器甕は、胴部外面にヘラケズリが施され、土師器坏の内面はヘラミガキ後、黒色処理されている。

④　整地地業

【ＳＸ 620】

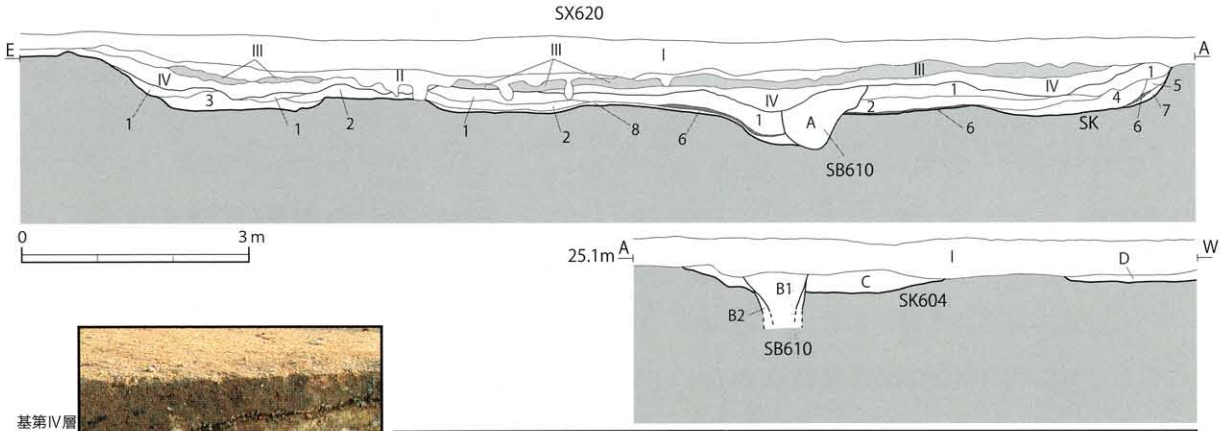
調査区中央のⅧ層上面で検出した。南辺の段丘崖から北にゆるやかにのびる。浅い沢地状地形部分における、幅の広い溝状の掘り込みと盛土による平坦面の造成地業と考えられる。ＳＢ６１０と重複し、これより古い。

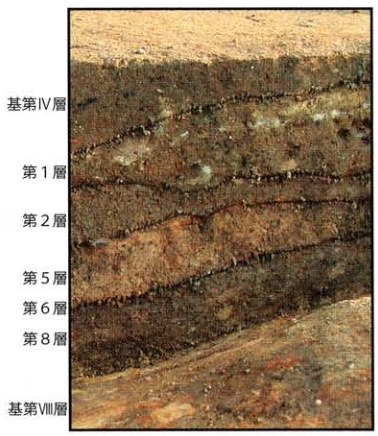
検出幅は調査区南辺で最大約 14 m、深さ 0.8 mである。堆積土は、窪みに堆積するかたちで基本層Ⅰ～Ⅳ層に覆われ、以下、８層に分けられる（図版 11）。第１～４層は人為的埋土。第６層は炭化物層、第７・８層は掘り込み直後の掘り方埋土である。また、第１～４層は調査区南端のＳＢ６１０周辺のみに分布しておりＳＢ６１０構築時の整地と考えられるものである。更にこれらの内、第１・２層はＳＫ 604 までのびており、整地が土取り穴群の埋め戻しと同時期に施された状況を確認している。

底面はほぼ平坦で、壁はやや急に立ち上がるが、段丘崖に近い南側では底面の数ヶ所に深さ約 10 ～ 20cm 程の土壙状の浅い凹みがみられる。

地業の性格については道路跡等の施設である可能性も考えられるが、今回の調査では詳細を明らかにすることはできなかった。

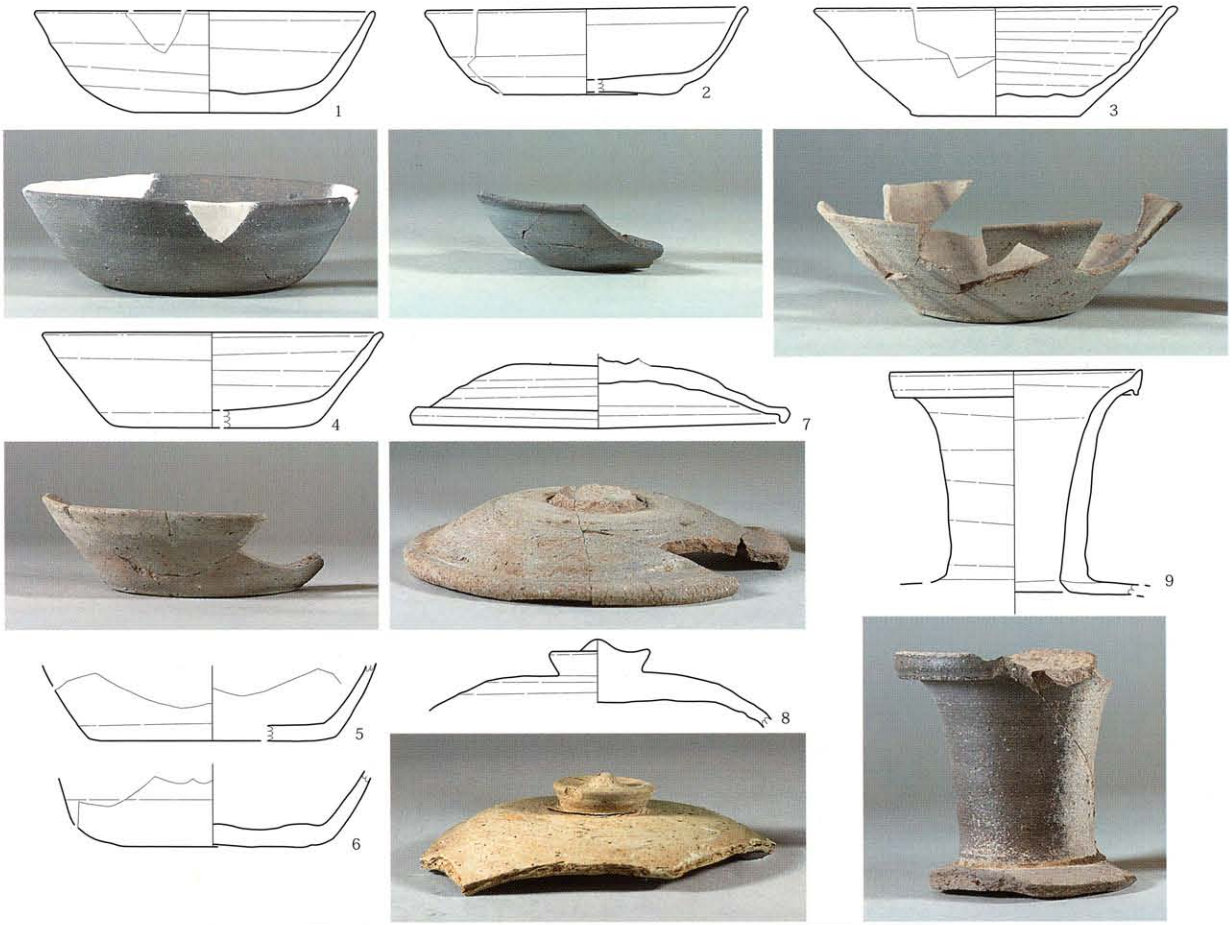
［出土遺物］第１層から非ロクロ調整の土師器坏・甕や須恵器坏・高台付坏・甕などが少量出土したのみである。





層位	土　色	土 性	特　徴	備　考
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	暗褐シルト，炭化物，焼土粒，小礫多く含む。	人為的埋土
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物粒やや多く、地山，焼土粒少量含む。	人為的埋土
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物，地山粒を少量含む	人為的埋土
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物粒，地山粒を少量含む	人為的埋土
5	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	黒褐シルト，炭化物，焼土粒を含む	人為的埋土
6	黒褐色 (10YR2/2)	炭化物層		自然堆積
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物，地山粒を少量含む	SX620 掘方埋土
8	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒多く含む	SX620 掘方埋土
A	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多量、炭化物ブロック少量含む	SB610 抜取穴
B1	暗褐色 (10YR3/5)	シルト	炭化物ブロックを少量含む	SB610 抜取穴
B2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	暗褐シルト，炭化物，焼土粒，小礫多く含む。	SB610 掘方埋土
C	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物，地山粒を少量含む	SK604 埋土
D	暗褐色 (10YR3/3)	シルト		SK623 埋土

図版 11　SX620 整地地業



No.	種　別	層　位	特　徴	口径	底径	器高
1	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	13.3	7.4	4.1
2	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	(12.6)	(7.2)	3.5
3	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	14.2	6.6	4.4
4	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ	(13.3)	(8.1)	3.8
5	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ		(9.8)	
6	須恵器　坏	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラ切り→ナデ		(7.4)	
7	須恵器　蓋	Ⅲ・Ⅳ層	内　面：ロクロナデ　墨痕あり硯転用？外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り	14.8		
8	須恵器　蓋	Ⅲ・Ⅳ層	内　面：ロクロナデ　外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り			
9	須恵器　長頸壺	Ⅲ・Ⅳ層	内外面：ロクロナデ	8.4		

図版 12　SX620 周辺基本層位出土遺物

⑤　その他の出土遺物

【基本層位第Ⅲ・Ⅳ層】

土師器坏、鉢、甕、須恵器坏、高台付坏、蓋、長頸壺、甕が整理用コンテナで約２箱出土しているが、多くは小破片のため、図示できたのは須恵器坏・蓋・長頸壺の９点のみである（図版 12）。

図示以外の遺物の特徴としては、土師器坏は、非ロクロ調整とロクロ調整のものがあり、内面調整は両者ともにヘラミガキ後、黒色処理されている。外面は前者は小破片の為、詳細不明。後者は底部回転糸切り後、回転ヘラケズリされている。土師器鉢はロクロ調整で、内面調整はヘラミガキ後、黒色処理。外面は底部回転ヘラ切り後、ナデ調整されている。土師器甕は非ロクロ調整とロクロ調整のものがあり、前者には長胴形と球胴形のものとがあり、長胴形の甕には、頸部に段を有するものもみられる。後者は小破片の為、詳細は不明である。須恵器坏には底部回転糸切り後、無調整のものもみとめられる。須恵器蓋には内面に墨痕があり、硯に転用されたと考えられるものがある。甕は外面に平行叩き目、内面に円弧状のあて具痕がある胴部破片である。

No.	種　別	出土遺構	特　徴	口径	底径	器高
1	須恵器　蓋	確認面	内面：ロクロナデ外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り	13.1		3.7
2	須恵器　蓋	確認面	内面：ロクロナデ外面：ロクロナデ→回転ヘラ削り 火ダスキ	14.3		
3	須恵器　平瓶	確認面	内外面：ロクロナデ　外面に自然釉		5.4	
4	平瓦	確認面	凹面：布目→ナデ　凸面：縄叩き　側縁：ケズリ			
5	平瓦	確認面	凹面：布目　凸面：縄叩き			

図版 13　東区遺構確認面出土遺物

【遺構確認面】

土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・甕、平瓦、丸瓦、フイゴの羽口、鉄製品などが整理用コンテナで２箱程出土しているが、多くは小破片のため、図示できたものは須恵器蓋、平瓶、平瓦の５点のみである（図版 13）。

図示以外の遺物の特徴としては、土師器坏はロクロ調整で、内面調整はヘラミガキ後、黒色処理され、外面は底部回転糸切り後、無調整である。土師器甕は、非ロクロ調整とロクロ調整のものがある。前者には長胴形と球胴形のものがあり、長胴形の甕には、頸部に段が有するものもみられる。

器面調整は口縁部はヨコナデ、胴部は外面がヘラケズリ、内面はナデ調整されている。ロクロ調整の土師器甕は、は小破片の為、詳細は不明である。

須恵器は坏、高台付坏ともに底部ヘラ切り後、ナデ調整されているものが多いが、坏には回転糸切り無調整のものもみとめられる。甕は外面に平行叩き目、内面に円弧状のあて具痕がある胴部破片である。

羽口は小破片でわずかに鉄滓が付着している。鉄製品に関しては、内部の腐食が進んでいるものの、刀子の一部と考えられる。

（2）遺構の重複関係と時期

【西区】

主に掘立柱建物跡をみてみると、ＳＢ612とＳＢ615、ＳＢ613とＳＢ614が位置的に重複するが、これら２つのグループも軒先が近接することから、最大４時期の変遷が想定される。但し、調査区が狭小で建物跡として認識することは出来なかったが、周辺では数多くの柱穴が検出されており、これらの他にも多くの建物跡が存在し、重複関係を有していたものと考えられる。

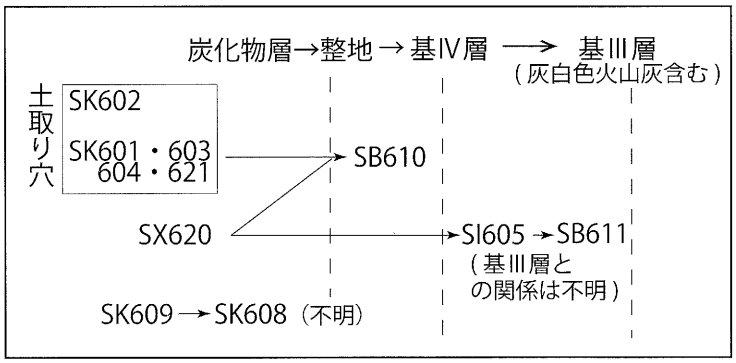
時期については、平面確認のみの調査であることと、共伴遺物が極めて少ないため詳細を知り得るものはないが、ＳＢ612・615については第27次調査で確認し、８世紀後半から９世紀代とされたＳＢ540Bと柱穴規模や建物方向が同様であり、ほぼ同時期のものである可能性を有している。また、ＳＢ613は柱穴埋土に灰白色火山灰ブロックが含まれていることから、10世紀前葉以降の建物跡であると考えられる。

その他の遺構としては、ＳＤ630はＳＢ613・614と位置的に重複するが直接の新旧関係はない。

時期は、重複する柱穴（Pit G）の掘方埋土に灰白色火山灰ブロックが含まれており、これより新しいことから10世紀前葉以降の溝跡であることがわかる。なお、ＳＤ629、ＳＫ626～628についてはＳＫ627がＳＢ612より新しいが、掘り下げは行っておらず、時期について詳細は不明である。

【東区】

主な遺構について重複関係を整理すると図版14のようになる。前述のように、土取り穴と考えられるＳＫ601・603・604・621とＳＸ620はＳＢ610構築前に、ほぼ同時に埋め戻されており、精査を行ったＳＫ601・602とＳＸ620では共通して炭化物層が堆積した後に埋め戻しがなされている。炭化物層の性格や時期の詳細については不明であるが、火災等の事象後、周辺を整地してＳＢ610が建てられたことを想起させるものである。



図版14　主な遺構の重複関係

遺構の時期については、共伴遺物が少なく、詳細を知り得るものはないが、図版14で掲げた遺構については、ＳＢ610、ＳＫ601・603・604・621、ＳＸ620は灰白色火山灰ブロックを含む第Ⅲ層やその直下に堆積した第Ⅳ層よりは古いことが堆積土の状況からわかっている。さらに出土遺物を見てみると、殆どが8世紀後半から9世紀代の伊治城期の遺物であり、これらの遺構の時期もほぼそれに対応させるのが妥当と思われる。

ＳＩ605、ＳＢ611については、ＳＩ605がＳＸ620より新しく、第Ⅳ層上面から掘り込まれており、ＳＢ611はそれより新しい。第Ⅲ層との新旧関係は不明であるが、両者ともに埋土に灰白色火山灰は認められず、火山灰降下以前の遺構と考えられる。

Ⅶ. 旧石器時代

本遺跡では、発掘調査で尖頭器やサイドスクレイパー、石刃などが散発的に出土していた（築館町教育委員会1992、1994、1995、2001）他、北西部の要害地区で石核や剥片が採集されている（築館町史編纂委員会1976）が、旧石器の分布する確実な場所については特定できていなかった。

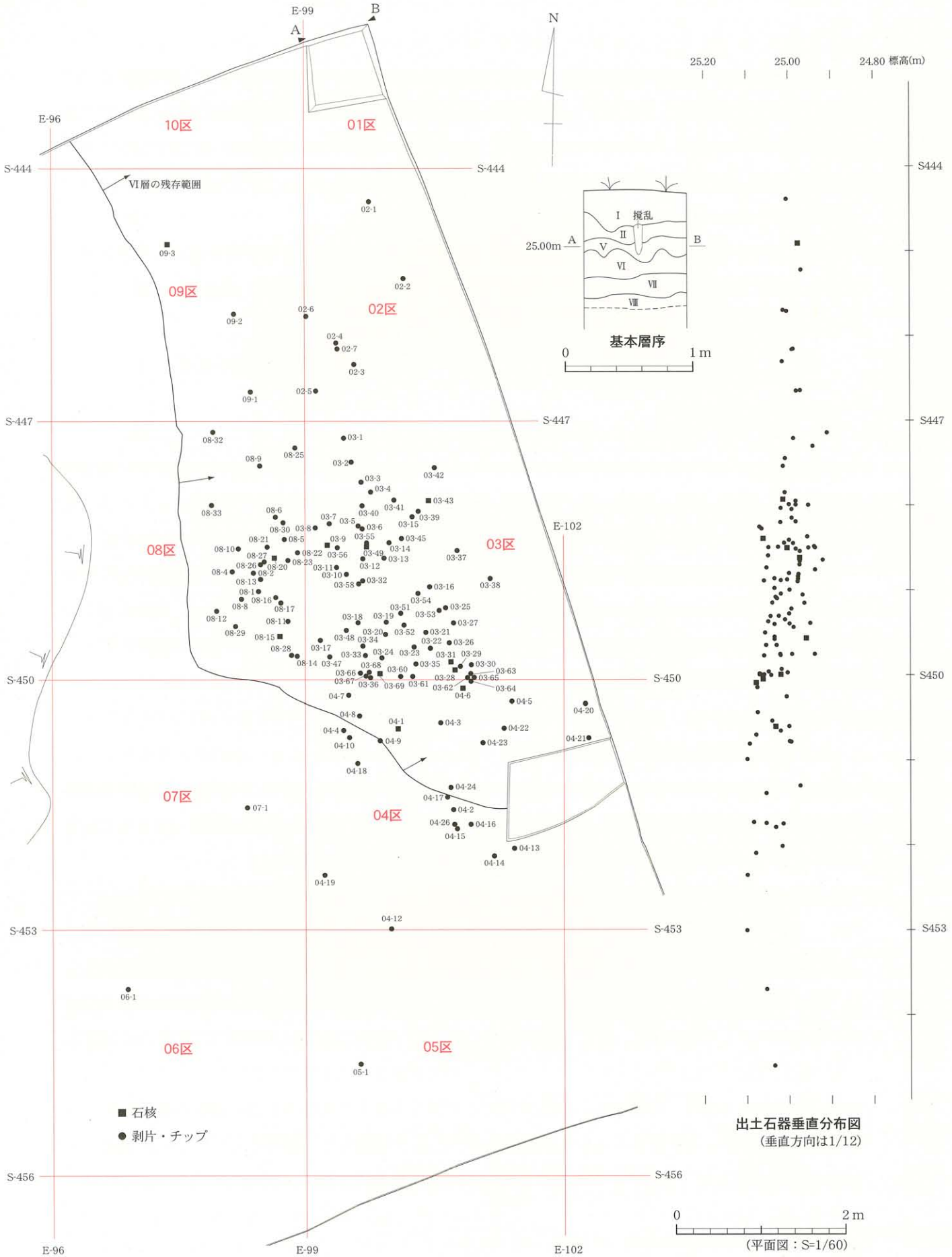
しかし、伊治城外郭南辺区画施設の解明を目的とした今回の発掘調査で、古代の遺構の他に良好なまとまりをもつ旧石器を発見した。このことにより、伊治城が立地している丘陵では、迫川に面した南東部一帯が旧石器の分布する場所の一つであることを確認した。以下、今回の調査の概要について説明する。

（1）調査にいたる経緯と調査の方法

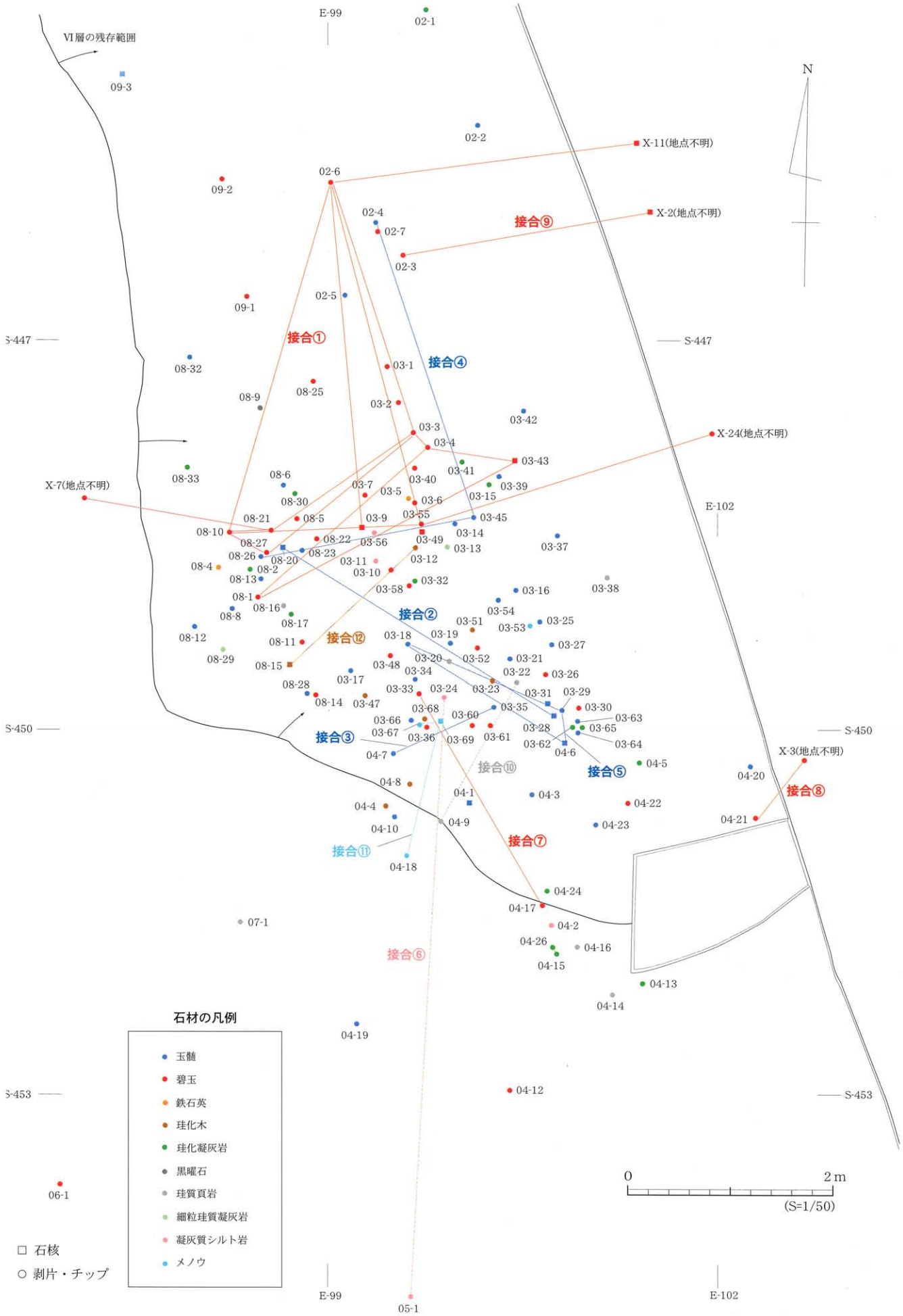
東調査区東端部では古代等の遺構、土器等の遺物は発見されなかったが、表土除去後の遺構確認作業中に、石器が十数点発見された。さらに暗褐色土層（Ⅴ層）中に数点の石器が埋まっている状況を確認したため、旧石器である可能性が高いと考え、精査を行うことにした。

旧石器出土位置の記録は伊治城跡原点1、2を基準として、石器が出土したＳ＝96～102、Ｅ＝441～459の範囲に1グリッド3×3ｍの01～10区を設定して行った（図版15）。石器の取り上げの際には、発見段階と全面を露出した段階で周囲の土を観察検討し、その都度記録写真を撮影した。取り上げ後はインプリントの確認を行った。また、取り上げた石器に黒色土の付着や農耕具等による傷がないことも確認した。取り上げた遺物には、グリッドごとに通し番号をつけ「02-1、02-2、…」、地点不明のものは「X-1、X-2、…」とした。写真撮影は、出土状況全景に35mmカラーリバーサル、デジタルカメラ、石器個々の出土状況にはデジタルカメラを使用した。石器が集中していた03、04、08区からはⅥ層の土を全て土壌サンプルとして採取した。採取したサンプルの容量は約90klである。そして、土壌サンプルをフルイにかけ選別作業（1㎜メッシュ）を行い、剥片・砕片を検出した。精査は石器が集中して出土した地点の一部である08区のみⅦ層上部まで行った。その結果、石器がⅤ・Ⅵ層からのみ出土することを確認した。

なお、調査期間の都合上、08区以外はⅣ層を完全に掘り下げることはできなかった。したがって、以下に述べる調査報告は、旧石器が出土した地点全体の様相を示したものではない。


E-99
A
B
N
E-96
10区
01区
S-444
VI層の残存範囲
09区
02区
S-447
08区
03区
E-102
S-450
07区
04区
S-453
06区
05区
S-456
■ 石核
● 剥片・チップ
25.20
25.00
24.80 標高(m)
S444
S447
S450
S453
I
撹乱
II
V
VI
VII
VIII
25.00m
基本層序
0
1 m
出土石器垂直分布図
(垂直方向は1/12)
0
2 m
(平面図：S=1/60)

図版 15　出土石器分布



図版16　出土石器の石材と接合状況

（2）石器の出土状況

石器は東調査区東端部の約 72 ㎡の範囲で確認されているが、特にその中央部（03、04、08 区）で南北約 7m、東西約 5m の範囲に分布が集中している（図版 15）。層理面に張り付くのではなく、Ⅵ層の傾斜に沿って標高 24.8 m～ 25.1 mの 30cm の範囲に広がり、水平、垂直、斜位と様々な状態で出土している。

（3）石器の種類と特徴

出土した石器の種類と数量はナイフ形石器 1 点、二次加工ある剥片 1 点、礫器 1 点、石核 14 点、剥片 146 点、砕片 243 点であり、このうち剥片 13 点、砕片 242 点がサンプル選別である。なお、剥片・砕片に関しては、便宜的に長さが 1cm 以上のものを剥片、1cm より小さいものを砕片とした。

石材は碧玉、玉髄・瑪瑙が主体で全体の約 65% を占めている。他に珪化凝灰岩、珪化木、凝灰質シルト岩、細粒珪質凝灰岩、鉄石英、珪質頁岩、黒曜石等と多種類のものが見られる。珪質頁岩、黒曜石を除いては近辺の迫川流域で採取できるものである。

ここでは、ナイフ形石器、二次加工ある剥片、縦長剥片、礫器、石核、剥片・砕片について説明を行う。

【ナイフ形石器（X-13）】(図版 17)

先端の尖る縦長剥片を素材としている。素材の剥片の打面は平坦で、背面の剥離方向は腹面の剥離方向と同じである。打面側を基部とし、基部の両側縁に腹面側から急角度の加工が施されている。石材は黒曜石である。なお、今回の調査では黒曜石製の石器はこのナイフ形石器の他に剥片が 2 点出土しているのみで、全て母岩が異なる。

【二次加工ある剥片（02-2）】（図版 17）

02 区Ⅳ層から出土。やや縦長の小形剥片を素材としており、背面の剥離方向は腹面の剥離方向と同じである。素材の背面側右側縁先端部に、腹面側から細かな急角度の加工が施されている。石材は瑪瑙である。

【縦長剥片（04-16）】（図版 17）

04 区Ⅳ層から出土。打面は平坦打面で、背面の剥離方向は腹面の剥離方向と同じである。縁辺部には、不連続な剥離痕が若干認められる。石材は凝灰質頁岩である。

【礫器（X-26）】（図版 17）

扁平で細長い礫を素材としており、一端に折断面が残る。断面はカマボコ形を呈している。平らな面（a 面）先端部に大きな剥離痕があり、左側縁に沿って表裏両面に連続的な加工が施されている。石材は凝灰岩である。長さ 14.4cm、幅 10cm、厚さ 3.9cm、重さ 654g。

【石核】（図版 17）

石核は、接合資料も含めると 14 点出土しており、剥片素材、分割礫素材の 2 種類に分けられる。なお、接合資料⑤は 03-29 を剥片、04-6 を石核としているが、原石を半割したものであり、03-29 についても石核の素材となりうるものと考えられる。03-18 は剥離時に生じた砕片である。

剥片素材の石核は、長さが 7 ～ 10cm で厚みのある大形の剥片を素材としているものと、3 ～

4cmの小形の剥片を素材としているものに分けられる。大形の剥片素材の石核は接合資料①で見られる。小形の剥片素材の石核には03-31、03-49、04-1がある。

分割礫素材には09-3、接合資料②の03-28、08-20、⑨のX-2、⑪の03-69、⑫の08-15がある。主に分割面もしくは自然面を打面として、作業面を固定して剥片剥離作業を行っている。

両者とも打面再生、打面転移は認められない。

【剥片・砕片】（図版18・19）

剥片・砕片は合計389点出土しており、出土遺物に占める割合は約97%になる。

剥片の大きさは、長さ1～10cm、幅0.8～7.7cm、厚さ0.1～5cmの範囲に分布するが、長さ2～5cm、幅1.5～3.5cmに収まるものが多い。長幅比（長／幅）を見ると1:1～1:2の間に集中しており、やや縦長の不定形なものが中心であるといえる。剥片を見る限り、形態的に縦長剥片、石刃に類似するものは少ない。背面に自然面を残しているものが多く、打面は平坦打面もしくは自然面打面が中心で、背面の剥離方向と腹面の剥離方向が同じのものが多い。

（4）剥片剥離作業について

接合資料、石核、剥片の検討をとおして剥片剥離作業の復元を試みる。

①接合資料

接合資料は12例確認している。接合資料①、⑨、⑪、⑫は石核と剥片が接合したもので、接合資料③、④、⑥、⑦、⑧、⑩は剥片同士の接合、接合資料②は分割礫を素材とした石核同士の接合である。同一母岩は接合資料①以外で明確に特定できる資料はない。

【接合資料①】（図版21～23）

同一母岩の石器が24点特定でき、その内の剥片11点、石核3点が接合している。石材は碧玉。02-6と08-10はⅤ層、それ以外はⅥ層出土。石器集中地点の中でも北寄りに分布する傾向がある。

接合資料①から復元できる剥片剥離の工程は、一辺が15～20cmの礫から自然面を除去するかたちで、大形の剥片（長さ7～8cm、幅5～6cm、厚さ5～6cm）を剥離する作業（A）と、その後に残された素材に平坦打面を設け、やや小形の剥片（長さ3～4cm、幅1～2cm、厚さ0.5～1cm）を連続して剥離する作業（B）の2工程に大別される。①-Ⅰ、①-Ⅱ、①-Ⅲ、①-Ⅳ（図版22）は（A）工程で剥離された剥片の一部で、剥離の順はⅠ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳとなる。このうち①-Ⅱ（02-6）以外は、さらにこれらを石核として、剥片剥離作業が行われている。いずれの剥離工程でも打面調整や打面再生、打面転移は行われていない。

①-Ⅰ（図版21）は→aの方向からの加撃で剥離され、剥離した剥片の腹面を打面とし、剥片剥離を行っている。剥離した剥片は確認できなかったが、石核(03-9)の作業面に残った剥離痕からみて、長さ3～4cmのやや縦長の小形剥片を剥離していたと考えられる。石核(03-9)は長さ6cm、幅4.6cm、厚さ6.6cmである。①-Ⅱ(02-6)(図版21)は、→bの方向からの加撃で剥離されている。①-Ⅲ(図版22)は、→cの方向からの加撃で剥離されている。剥片（長さ6cm、幅9cm、厚さ3cm）の腹面側から加撃して打面を作出し、腹面側を作業面にして剥片剥離を進めている。接合した剥片は2点

(03-55+X-24、08-1)（図版 21）で、03-4（図版 21）は剥離作業時に節理面に沿って割れたものである。①-Ⅳ（X-11）（図版 22）は、素材の背面側から加撃して打面を作出し、縦長の剥片（長さ 3 ～ 4cm、幅 0.5 ～ 2cm）を剥離していたと考えられる。石核（X-11）は円柱状を呈する。

①-Ⅴ（図版 22）は（B）工程で剥離されたやや縦長の小形剥片 4 点（08-10、08-27、08-21、X-7+03-59）（図版 22）の接合資料で同一の打面から剥離されている。これらを剥離した石核は確認していない。

【接合資料⑨】（図版 24）

石核（X-2）1 点と剥片（02-3）1 点の 2 点の接合資料である。石材は碧玉。02-3 はⅤ層から出土。

自然面を残す扁平な分割礫を素材とし、側面の剥離面を作業面としてやや縦長の剥片を剥離している。打面は平坦打面で、打面再生、打面転移は認められず、作業面は 1 つである。剥片（02-3）は打面側が欠損している。

【接合資料⑪】（図版 24）

石核（03-69）1 点と、剥片 2 点（03-67、04-18）の 3 点の接合資料である。石材は瑪瑙。03-67、03-69 はⅥ層、04-18 はⅤ層出土。

直径 7 ～ 8cm のやや扁平な小形の円礫を半割、もしくは分割したものを素材とし、平坦な分割面を打面とし、やや幅広の剥片を剥離している。打面は平坦打面で、打面再生、打面転移は認められない。石核は形状から剥片剥離がかなり進んだ状態であると考えられる。

【接合資料⑫】（図版 24）

石核（08-15）1 点と剥片（03-12）1 点の 2 点の接合資料である。石材は珪化木。ともにⅥ層出土。

分割礫を素材とする。平坦な打面を設け、やや幅広の剥片を剥離している。打面再生、打面転移は認められない。作業面、打面以外の面は大きな剥離面で構成されており、素材の分割面と考えられる。

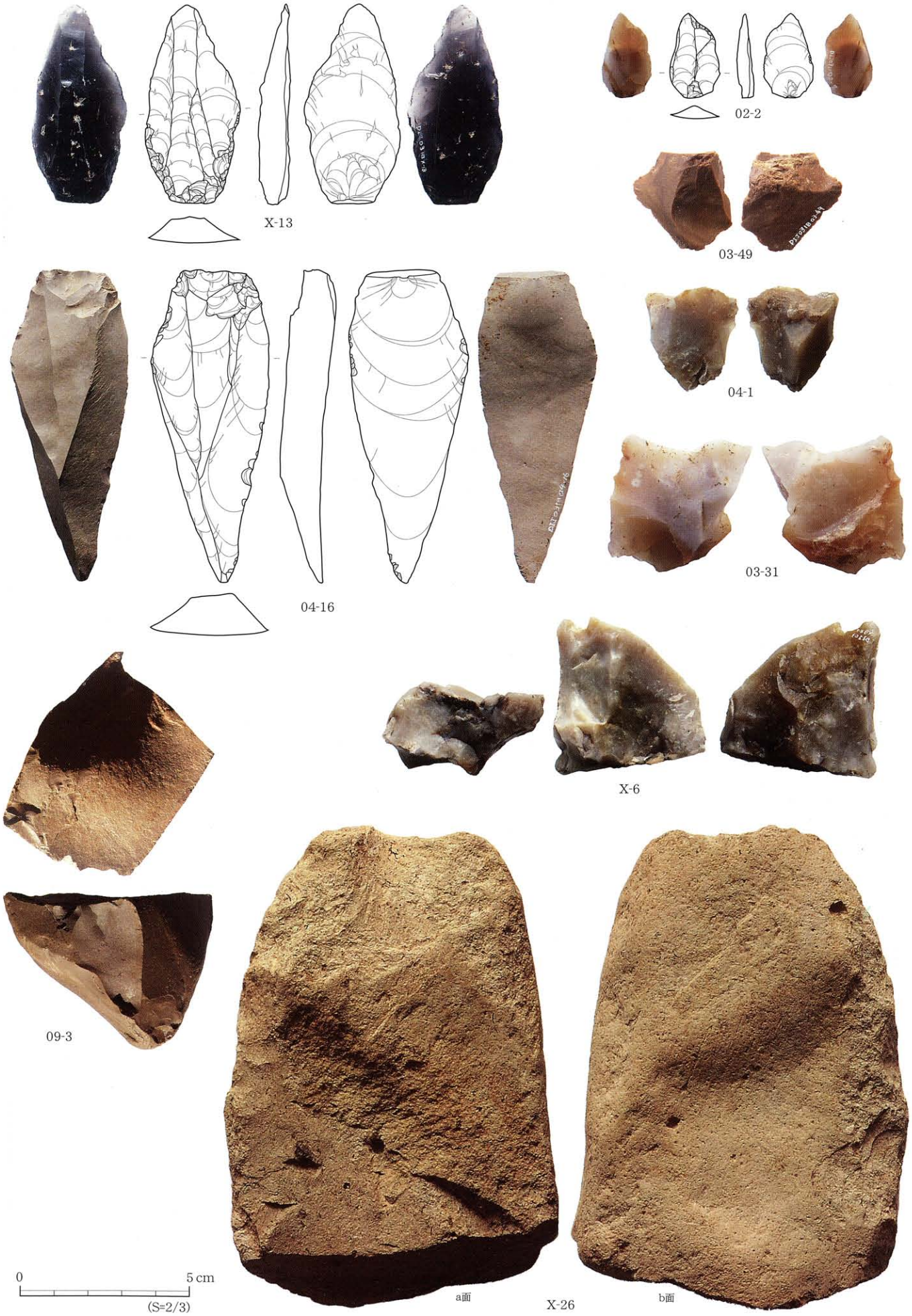
②剥片剥離作業について

接合資料から復元される剥片剥離作業の特徴は次のようにまとめられる。石核の素材は剥片と分割礫の 2 種類に大別されるが、打面転移、打面再生を行わず打面、作業面を 1 ケ所に固定して剥離作業を進めていることは共通している。また、打面調整や作業面に対する種々の調整技術は見られない。

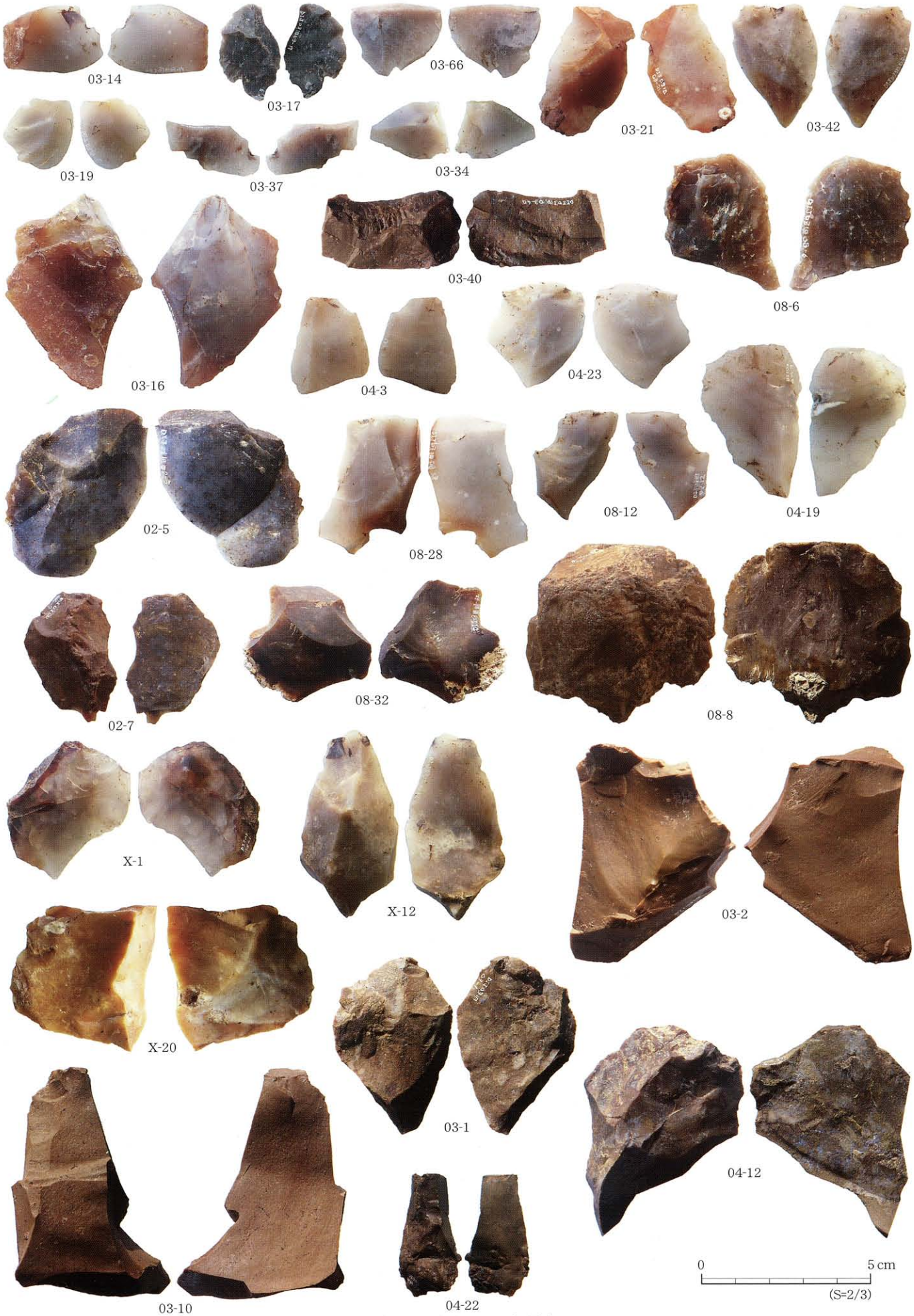
出土した剥片は、長さは石核の大きさに制約を受けるが、4 ～ 5cm と 1.5cm 前後にまとまり、形はやや縦長で不定形のものが主体を占めている。

ところで、接合資料①－ⅣのX-11 は剥片素材の石核で、一端がやや尖り気味の比較的整った円柱状をなす。背面側からの加撃で作出された平坦打面で、打面の周囲を巡るように腹面側から側面を作業面として剥離作業を進めている。石核と接合する剥片は確認できないが、石核に残る剥離面から、長さ 3 ～ 5cm の縦長の剥片 (長幅比 2:1 前後) が連続して剥離されていたと考えられる。剥離作業の進め方は、打面再生や打面転移がなく、調整技術も伴わないことから、他の接合資料の場合と基本的には共通しているといえるが、石核の剥離面から想定される剥離された剥片は、出土した他の剥片より縦長の傾向が強いといえる。

また、X-11 では剥離作業が進行し、多くの剥片が剥離されているにも関わらず、剥離された剥片



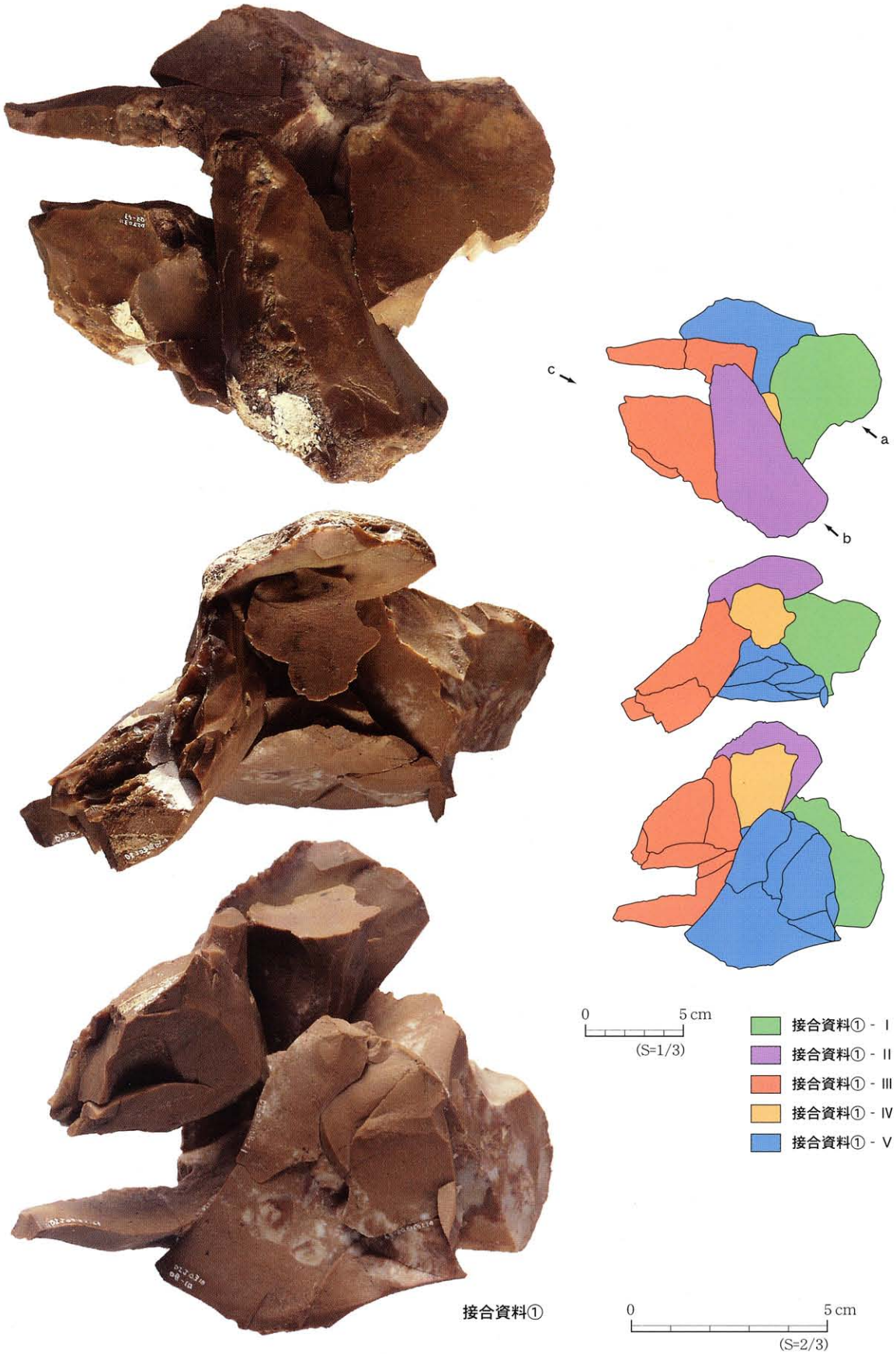
図版 17　出土石器（ナイフ形石器・剥片・石核・礫器）


03-14
03-17
03-66
03-21
03-42
03-19
03-37
03-34
03-40
08-6
03-16
04-3
04-23
02-5
08-28
08-12
04-19
02-7
08-32
08-8
X-1
X-12
03-2
X-20
03-1
04-12
03-10
04-22
0
5 cm
(S=2/3)

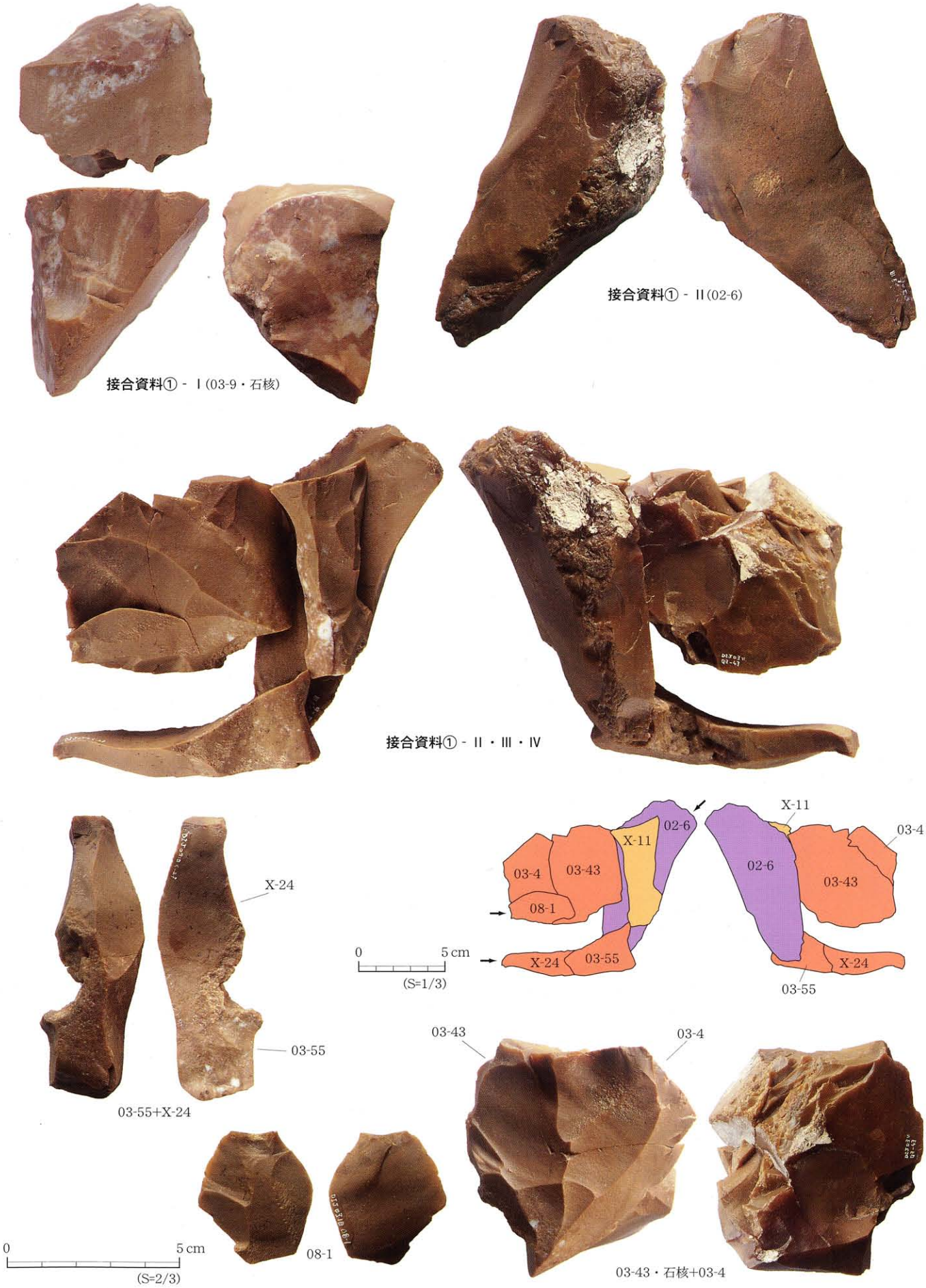
図版 18　出土石器（剥片）

06-1
08-5
09-2
08-14
08-11
X-8
09-1
X-5
X-4
03-11
X-21
02-1
04-5
03-32
08-29
04-24
04-13
X-18
03-20
X-10
04-15+04-26
04-14
04-4
X-9
03-68
08-9
03-23
03-5
0
5 cm
(S=2/3)

図版 19　出土石器（剥片）

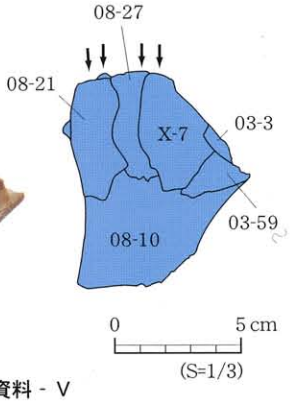


図版 21　出土石器（接合資料）



図版 22　出土石器（接合資料）

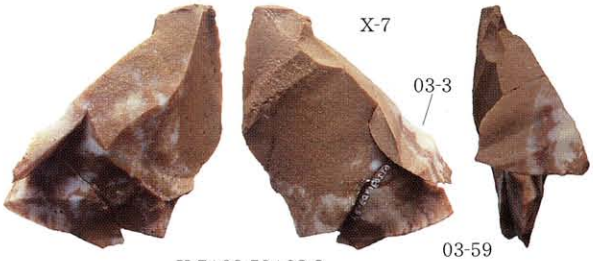
接合資料① - Ⅳ(X-11・石核)



接合資料 - Ⅴ

08-10

08-27

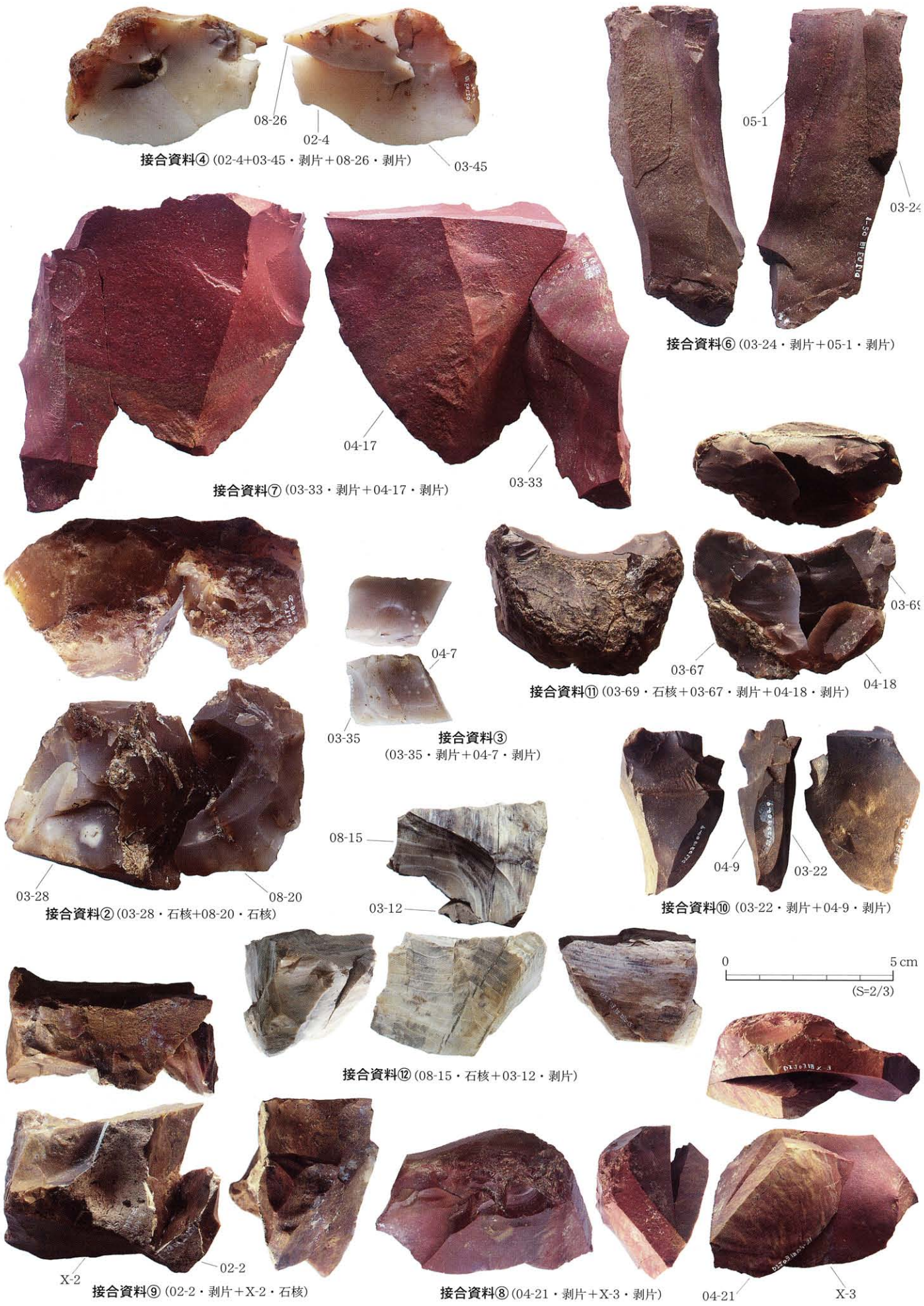


X-7+03-59+03-3

08-21

0 5 cm
(S=2/3)

図版 23　出土石器（接合資料）



接合資料④ (02-4+03-45・剥片＋08-26・剥片)

接合資料⑥ (03-24・剥片＋05-1・剥片)

接合資料⑦ (03-33・剥片＋04-17・剥片)

接合資料⑪ (03-69・石核＋03-67・剥片＋04-18・剥片)

接合資料③ (03-35・剥片＋04-7・剥片)

接合資料② (03-28・石核+08-20・石核)

接合資料⑩ (03-22・剥片＋04-9・剥片)

接合資料⑫ (08-15・石核＋03-12・剥片)

接合資料⑨ (02-2・剥片＋X-2・石核)

接合資料⑧ (04-21・剥片＋X-3・剥片)

図版 24　出土石器（接合資料）

東調査区全景(東から)

調査区北東隅A-B断面(基本層序)

石器集中地点(西から)

石器集中地点(南から)

04-16出土状況

08-1出土状況

03-49出土状況

03-49インプリント

図版 25 石器出土状況

表４

	グリッド№	石器№	標高 (m)	層位	器種	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	長幅比	重量 (g)	備考	図版番号
1	０２	02-1	25.005	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.2	2.6	0.8	0.9	3.1		19
2		02-2	24.972	Ⅵ	剥片	玉髄	2.6	1.5	0.5	1.7	1.3	二次加工	17
3		02-3	25.017	Ⅴ	剥片	碧玉	3.5	2.3	1.3	1.5	9.5	接合資料⑨	24
4		02-4	24.994	Ⅵ	剥片	玉髄	4.8	3.2	1.5	1.5	15.0	接合資料④	24
5		02-5	24.983	Ⅵ	剥片	玉髄	5.5	3.8	1.4	1.5	24.2		18
6		02-6	25.015	Ⅴ	剥片	碧玉	10.3	5.1	2.1	2.0	86.0	接合資料①	21・22
7		02-7	24.990	Ⅵ	剥片	碧玉	3.9	2.7	1.2	1.4	10.4		18
8	０３	03-1	24.988	Ⅵ	剥片	碧玉	5.3	3.5	0.8	1.5	13.4		18
9		03-2	25.012	Ⅵ	剥片	碧玉	6.9	5.4	1.7	1.3	57.5		18
10		03-3	25.016	Ⅵ	剥片	碧玉	2.1	2.4	0.5	0.9	2.7	接合資料①	21・23
11		03-4	25.016	Ⅵ	剥片	碧玉	3.1	4.4	1.9	0.7	25.8	接合資料①	21・22
12		03-5	25.063	Ⅵ	剥片	鉄石英	3.8	4.8	1.4	0.8	14.8	微細剥離	19
13		03-6	25.067	Ⅵ	剥片	碧玉	3.6	1.5	0.3	2.4	1.2		
14		03-7	25.019	Ⅵ	剥片	碧玉	1.7	1.1	0.4	1.6	0.8		
15		03-9	25.051	Ⅵ	石核	碧玉	6.0	4.6	6.6	―	157.0	接合資料①　作業面１　平坦打面	21・22
16		03-10	25.060	Ⅵ	剥片	碧玉	7.2	5.2	3.4	1.4	75.0		18
17		03-11	25.055	Ⅵ	剥片	凝灰質シルト岩	3.0	2.8	0.4	1.1	3.2		19
18		03-12	25.050	Ⅵ	剥片	珪化木	3.4	2.1	0.8	1.6	3.9	接合資料⑫	24
19		03-13	25.035	Ⅵ	剥片	珪質細粒凝灰岩	2.6	1.3	0.7	2.0	1.3	微細剥離	
20		03-14	25.020	Ⅵ	剥片	玉髄	2.1	2.8	1.1	0.8	5.8		18
21		03-15	25.050	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.1	0.8	0.4	2.6	0.6		
22		03-16	25.035	Ⅵ	剥片	玉髄	5.8	3.9	1.7	1.5	25.2		18
23		03-17	25.045	Ⅵ	剥片	玉髄	2.8	1.8	0.6	1.6	1.7		18
24		03-18	25.035	Ⅵ	剥片	玉髄	1.6	2.6	1.2	0.6	2.9	接合資料⑤	
25		03-19	25.051	Ⅵ	剥片	玉髄	2.2	1.9	0.6	1.2	1.8		18
26		03-20	25.060	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	3.5	1.9	0.7	1.8	2.6	微細剥離	19
27		03-21	25.034	Ⅵ	剥片	玉髄	3.9	2.3	0.8	1.7	6.0		18
28		03-22	25.050	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	5.0	3.5	1.6	1.4	19.0	接合資料⑩	24
29		03-23	25.056	Ⅵ	剥片	珪化木	2.6	1.8	0.7	1.4	2.4	微細剥離	19
30		03-24	25.058	Ⅵ	剥片	凝灰質シルト岩	5.4	2.5	1.1	2.2	14.4	接合資料⑥	24
31		03-25	25.042	Ⅵ	剥片	玉髄	1.8	1.6	0.5	1.1	0.9		
32		03-26	25.019	Ⅵ	剥片	碧玉	2.4	2.1	0.5	1.1	1.3		
33		03-27	25.034	Ⅵ	剥片	玉髄	1.3	1.7	0.2	0.8	0.6		
34		03-28	25.068	Ⅵ	石核	玉髄	6.0	5.0	4.9	―	162.0	接合資料②　作業面２　自然面打面	24
35		03-29	25.060	Ⅵ	剥片	玉髄	7.2	7.6	5.0	0.9	247.0	接合資料⑤	
36		03-30	25.060	Ⅴ	剥片	碧玉	1.5	1.8	0.3	0.8	1.0		
37		03-31	25.014	Ⅵ	石核	玉髄	3.9	4.1	1.3	―	19.8	剥片素材　作業面１　平坦打面	17
38		03-32	25.020	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.4	2.4	0.4	1.0	2.0		19
39		03-33	25.018	Ⅵ	剥片	碧玉	8.6	4.0	1.8	2.2	51.5	接合資料⑦	24
40		03-34	25.032	Ⅵ	剥片	玉髄	2.3	1.8	0.7	1.3	1.9		18
41		03-35	25.014	Ⅵ	剥片	玉髄	2.1	3.0	1.1	0.7	5.9	接合資料③	24
42		03-36	25.070	Ⅴ	剥片	碧玉	4.0	2.6	1.6	1.5	11.0	微細剥離	
43		03-37	25.025	Ⅵ	剥片	玉髄	1.7	2.9	0.6	0.6	2.0		18
44		03-38	25.005	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	2.0	1.8	0.7	1.1	2.2		
45		03-39	25.020	Ⅵ	剥片	玉髄	1.4	1.7	0.4	0.8	0.7		
46		03-40	24.984	Ⅵ	剥片	碧玉	4.1	2.3	1.0	1.8	10.2		18
47		03-41	24.985	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	3.1	2.6	0.7	1.2	4.6		
48		03-42	24.995	Ⅵ	剥片	玉髄	3.7	2.5	0.6	1.5	5.4		18
49		03-43	25.002	Ⅵ	石核	碧玉	5.3	5.6	5.2	―	106.0	接合資料①　作業面１　平坦打面	21・22
50		03-45	24.975	Ⅵ	剥片	玉髄	4.3	3.0	0.9	1.4	6.7	接合資料④	24
51		03-47	24.994	Ⅵ	剥片	珪化木	3.3	1.3	0.4	2.5	1.1		
52		03-48	24.988	Ⅵ	剥片	碧玉	2.7	1.2	0.6	2.3	1.3		
53		03-49	25.005	Ⅵ	石核	碧玉	3.1	2.9	1.3	―	8.9	剥片素材　作業面１　平坦打面	17
54		03-51	24.999	Ⅵ	剥片	珪化木	1.9	1.8	0.2	1.1	0.7		
55		03-52	24.994	Ⅵ	剥片	碧玉	4.5	2.3	1.5	1.9	11.2		
56		03-53	24.996	Ⅵ	剥片	瑪瑙	1.3	1.3	0.1	1.0	0.3		
57		03-54	25.018	Ⅵ	剥片	玉髄	1.7	1.5	0.4	1.1	1.2		
58		03-55	24.990	Ⅵ	剥片	碧玉	4.2	2.6	2.5	1.6	26.8	接合資料①	21・22
59		03-56	24.985	Ⅵ	剥片	凝灰質シルト岩	1.0	1.9	0.4	0.5	0.6		
60		03-58	24.982	Ⅵ	剥片	碧玉	3.1	2.1	1.4	1.4	8.0		
61		03-59		Ⅵ	剥片	碧玉	2.2	1.6	0.7	1.4	2.9	接合資料①	21・23
62		03-60		Ⅵ	剥片	碧玉	2.1	1.8	0.5	1.2	1.6		
63		03-61		Ⅵ	剥片	碧玉	6.0	3.3	2.3	1.5	26.6		
64		03-62		Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	1.5	1.8	1.0	0.8	2.8		
65		03-63		Ⅵ	剥片	玉髄	3.1	2.5	0.8	1.2	3.5		
66		03-64		Ⅵ	剥片	玉髄	2.4	1.8	0.2	1.3	0.6		
67		03-65		Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.8	0.9	0.7	3.1	1.2		
68		03-66		Ⅵ	剥片	玉髄	2.2	2.7	0.5	0.8	2.2	打面部欠損	18
69		03-67		Ⅵ	剥片	瑪瑙	3.9	4.1	1.9	0.9	23.6	接合資料⑪	24
70		03-68		Ⅵ	剥片	珪化木	2.1	2.8	0.4	0.8	2.1		19
71		03-69		Ⅵ	石核	瑪瑙	3.9	5.0	2.2	―	38.4	接合資料⑪　作業面１　平坦打面	24
72		03-70		Ⅵ	剥片	珪質頁岩	1.9	1.6	0.7	1.2	1.6		
73	０４	04-1	25.035	Ⅵ	石核	玉髄	3.3	2.6	1.9	―	12.4	剥片素材　作業面２　自然面打面	17
74		04-2	25.085	Ⅵ	剥片	凝灰質シルト岩	3.7	2.5	0.9	1.5	4.9		
75		04-3	25.040	Ⅵ	剥片	玉髄	3.0	2.3	0.4	1.3	2.7		18
76		04-4	25.020	Ⅵ	剥片	珪化木	2.5	2.6	0.5	0.9	3.0		19

表5

	グリッドNo.	石器No.	標高 (m)	層位	器種	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	長幅比	重量 (g)	備考	図版番号
77		04-5	25.045	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	3.0	2.7	1.0	1.1	5.6		19
78		04-6	25.069	Ⅵ	石核	玉髄	13.5	11.7	6.1	—	1060.0	接合資料⑤	
79		04-7	25.079	Ⅵ	剥片	玉髄	2.2	2.3	0.9	0.9	3.3	接合資料③	24
80		04-8	25.075	Ⅴ	剥片	珪化木	2.4	2.4	0.6	1.0	2.2		
81		04-9	25.091	Ⅴ	剥片	珪質頁岩	3.0	2.2	0.6	1.4	3.7	接合資料⑩	24
82		04-10	25.079	Ⅵ	剥片	玉髄	1.5	2.4	0.2	0.6	0.9		
83		04-12	25.102	Ⅵ	剥片	碧玉	7.6	4.6	1.9	1.7	41.4		18
84		04-13	25.018	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	3.9	3.0	1.5	1.3	14.8		19
85		04-14	25.078	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	5.4	3.6	1.0	1.5	18.4		19
86		04-15	25.032	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	3.0	2.8	0.9	1.1	4.7		19
87		04-16	25.055	Ⅵ	剥片	凝灰質頁岩	9.2	3.5	1.4	2.6	32.4	縁辺部に微細剥離	17
88		04-17	25.048	Ⅵ	剥片	碧玉	8.0	7.7	4.1	1.1	181.0	接合資料⑦	24
89		04-18	25.096	Ⅴ	剥片	瑪瑙	1.8	2.7	1.7	0.7	6.6	接合資料⑪	24
90		04-19	25.097	Ⅵ	剥片	玉髄	4.5	2.9	1.0	1.6	8.6		18
91		04-20	25.007	Ⅵ	剥片	玉髄	8.7	5.5	4.2	1.6	133.0		
92		04-21	24.994	Ⅴ	剥片	碧玉	4.3	3.4	1.0	1.3	17.8	接合資料⑧　微細剥離	24
93		04-22	25.001	Ⅵ	剥片	碧玉	3.5	1.8	1.0	1.9	6.3		18
94		04-23	25.000	Ⅵ	剥片	玉髄	3.1	3.0	0.8	1.0	5.3		18
95		04-24	24.975	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	4.1	3.0	1.2	1.4	11.4		19
96		04-26	25.032	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	6.8	4.6	1.1	1.5	28.8		19
97	０５	05-1	25.037	Ⅵ	剥片	凝灰質シルト岩	9.6	3.9	1.4	2.5	50.5	接合資料⑥	24
98	０６	06-1	25.055	Ⅴ	剥片	碧玉	4.7	3.6	1.5	1.3	24.2		19
99	０７	07-1	25.075	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	2.4	2.2	0.7	1.1	1.6		
100	０８	08-1	25.000	Ⅵ	剥片	碧玉	4.0	3.4	1.0	1.2	10.4	接合資料①	21・22
101		08-2	25.000	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	3.5	2.8	0.9	1.3	8.1		
102		08-4	24.977	Ⅵ	剥片	鉄石英	3.1	2.1	1.4	1.5	5.5	微細剥離	
103		08-5	25.000	Ⅵ	剥片	碧玉	2.9	4.1	0.7	0.7	8.4		19
104		08-6	24.995	Ⅵ	剥片	玉髄	4.4	3.2	1.0	1.4	14.4	微細剥離	18
105		08-8	25.032	Ⅵ	剥片	玉髄	5.4	5.6	2.2	0.9	64.5		18
106		08-9	25.014	Ⅵ	剥片	黒曜石	5.1	2.2	1.5	2.3	10.4		19
107		08-10	25.031	Ⅴ	剥片	碧玉	7.9	7.4	3.2	1.1	111.0	接合資料①	21・23
108		08-11	25.009	Ⅵ	剥片	碧玉	2.1	1.1	0.5	1.9	1.4		19
109		08-12	25.026	Ⅵ	剥片	玉髄	3.3	2.4	0.6	1.4	3.1		18
110		08-13	24.980	Ⅵ	剥片	玉髄	1.1	1.8	1.3	0.6	2.2		
111		08-14	25.023	Ⅵ	剥片	碧玉	3.7	2.6	0.6	1.4	3.8		19
112		08-15	24.963	Ⅵ	石核	珪化木	4.0	4.5	4.1	—	59.0	接合資料⑫　作業面１　平坦打面	24
113		08-16	25.027	Ⅵ	剥片	珪質頁岩	1.5	1.8	0.4	0.8	0.9		
114		08-17	24.963	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.0	1.5	0.5	1.3	1.3		
115		08-20	24.975	Ⅵ	石核	玉髄	6.0	3.8	2.7	—	58.5	接合資料②　作業面１　平坦打面	24
116		08-21	24.955	Ⅵ	剥片	碧玉	4.6	2.1	0.7	2.2	6.1	接合資料①	21・23
117		08-22	24.975	Ⅵ	砕片	碧玉	0.9	0.9	0.1	1.0	0.2		
118		08-23	24.975	Ⅵ	剥片	玉髄	1.8	1.1	0.4	1.6	0.8	微細剥離	
119		08-25	24.945	Ⅵ	剥片	碧玉	2.6	2.1	0.5	1.2	2.7		
120		08-26	24.938	Ⅵ	剥片	玉髄	2.4	3.5	1.6	0.7	9.7	接合資料④	24
121		08-27	24.920	Ⅵ	剥片	碧玉	4.4	3.3	0.8	1.3	9.5	接合資料①	21・23
122		08-28	24.934	Ⅵ	剥片	玉髄	4.3	2.9	1.0	1.5	10.4		18
123		08-29	24.949	Ⅵ	剥片	細粒珪質凝灰岩	2.7	1.8	0.4	1.5	1.3		19
124		08-30	24.873	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	1.5	0.9	0.3	1.7	0.3		
125		08-32	24.908	Ⅵ	剥片	玉髄	3.8	3.7	1.6	1.1	17.8		18
126		08-33	24.955	Ⅵ	剥片	珪化凝灰岩	2.1	2.2	0.8	0.9	3.0	打面部欠損	
127	０９	09-1	24.975	Ⅵ	剥片	碧玉	5.6	4.3	1.7	1.3	36.6		19
128		09-2	25.006	Ⅵ	剥片	碧玉	5.0	3.6	1.1	1.4	23.0		19
129		09-3	24.976	Ⅵ	石核	凝灰質シルト岩	4.7	4.5	6.2	—	131.0	作業面１　平坦打面	17
130	地点不明	X-1			剥片	玉髄	4.2	3.4	1.0	1.2	13.4		18
131		X-2			石核	碧玉	5.8	5.0	3.5	—	109.0	接合資料⑨　作業面１　剥離面２	24
132		X-3			剥片	碧玉	6.3	4.1	2.3	1.5	54.5	接合資料⑧	24
133		X-4			剥片	碧玉	2.6	3.4	1.1	0.8	10.4		19
134		X-5			剥片	碧玉	5.0	4.3	1.2	1.2	24.8		19
135		X-6			石核	玉髄	4.8	4.5	3.7	—	52.5	作業面１　自然面打面	17
136		X-7			剥片	碧玉	4.5	3.2	1.4	1.4	15.8	接合資料①	21・23
137		X-8			剥片	碧玉	4.5	3.8	1.5	1.2	19.8		19
138		X-9			剥片	黒曜石	3.5	1.2	0.7	2.9	2.4		19
139		X-10			剥片	珪質頁岩	4.8	3.2	0.9	1.5	14.2		19
140		X-11			石核	碧玉	6.1	3.0	2.9	—	51.5	接合資料①	21・23
141		X-12			剥片	玉髄	5.5	2.9	1.6	1.9	21.6		18
142		X-13			ナイフ形石器	黒曜石	5.9	2.9	0.9	1.9	13.0	基部調整、腹面側右側縁にガジリ	17
143		X-14			剥片	碧玉	3.6	3.5	0.9	1.0	7.3		
144		X-18			剥片	珪化凝灰岩	3.4	3.0	0.6	1.1	5.8		19
145		X-20			剥片	玉髄	4.2	4.3	1.8	0.9	27.4		18
146		X-21			剥片	珪質頁岩	4.4	2.7	0.9	1.6	4.3		19
147		X-22			剥片	玉髄	2.1	1.5	0.3	1.4	0.7		
148		X-23			剥片	凝灰質シルト岩	1.7	1.6	0.5	1.1	0.9	先端部欠損	
149		X-24			剥片	碧玉	4.4	2.5	1.2	1.8	14.4	接合資料①	21・22
150		X-25			剥片	凝灰質シルト岩	3.5	1.5	0.6	2.3	2.2	微細剥離	
151		X-26			礫器		14.4	10.0	3.9	—	654.0	側縁に調整	17

が確認できない。このことは剥離された剥片が、トゥールもしくはその素材としてこの場から持ち出された可能性が高いことを示しており、この剥離作業では縦長の剥片の獲得が志向されていたと捉えることができる。これらの剥片はこの場から出土した黒曜石製のナイフ形石器のように別の場所で石器として使用された可能性が高いと見られる。

以上の点から、この場で行われた剥片剥離作業の目的は、ある程度の大きさを持つ縦長剥片の獲得であり、この場に残されたやや縦長の不定形な剥片の大部分はその際の副産物と考えられる。

（5）場所の性格

出土した石器のうち、道具としての石器が極めて少なく剥片・砕片が出土量の97%を占めること、接合資料が多く見られること、そして非常に細かい砕片があることから、この場所は何らかの特定の作業を行った場所ではなく、主として石器製作が行われた場所と考えられる。

（6）編年的位置づけ

宮城県内において、ある程度の数量の旧石器が出土した遺跡は、仙台市山田上ノ台遺跡（仙台市教委1985、2003）、富沢遺跡（仙台市教委1992）、上ノ原山遺跡（仙台市教委1995）、名取市野田山遺跡（名取市教委2002）などである。山田上ノ台遺跡では、石器出土の中心が6層で、姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ）の降灰層準が7層上部から6層と推測されている。石器群の特徴は、分割した礫や剥片を素材として剥片剥離を行い、これを素材とする基部加工ナイフ形石器を有する。年代は、24,000～25,000年前もしくはそれ以降の可能性が考えられている。富沢遺跡では、ＡＴ降灰期に近い層（27層）より、石器群が出土している。石器群の特徴は、調整を行わず剥片剥離を行い、石刃はわずかで、主に不定形剥片を中心としている。石器出土、27層の上部の26層は、20,000～23,000年の年代値が示されている。上ノ原山遺跡（Ⅳ区5層）では、石刃を素材とするナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンドスクレイパーなどが出土している。野田山遺跡では蔵王川崎スコリアと浅間板鼻軽石の間より、石刃素材のナイフ形石器、エンドスクレイパーなどが出土している。両設打面や稜調整、打面調整が認められる。山田上ノ台6層、富沢遺跡27層出土の石器群は石刃技法が未発達なのに対して、上ノ原山5層、野田山出土の石器群は調整技術の発達した石刃技法を伴い、この石刃を素材としたトゥールを組成している。

本遺跡出土の石器群は、基部加工のナイフ形石器、調整技術を駆使した真正な石刃技法を有しない剥片剥離技術から、山田上ノ台6層、富沢27層出土の石器群に近い様相を持っていると考えることができる。

このことから、本遺跡出土の石器群の年代については、自然化学分析等を行っていないので厳密に述べることはできないが、山田上ノ台6層、富沢27層出土の石器群に近い時期のものと考えられる。

Ⅷ. まとめ

【古代ー西区】

1．掘立柱建物跡４棟以上、土壙３基、溝跡３条などを検出した。また、調査区が狭小で建物跡として認識することは出来なかったが、周辺では数多くの柱穴を検出しており、上記の他にも多くの建物跡が存在していたものと考えられる。それにより、第27次調査で確認された掘立柱建物跡群のさらに東側でも掘立柱建物跡が多く存在し、外郭南半部が掘立柱建物跡を中心に構成される官衙ブロックであることを追認することができた。

2．遺物は掘立柱建物の柱穴、土壙などの確認面から、土師器・須恵器・平瓦などが整理用コンテナで１箱出土している。

【古代ー東区】

1．掘立柱建物跡２棟、竪穴遺構１基、土壙10基以上、整地地業１個所を検出した。

2．遺物は、掘立柱建物の柱穴、土壙などから、土師器・須恵器・丸瓦・平瓦などが整理用コンテナで９箱出土している。

3．ＳＫ601・602土壙内埋土中に築地塀の積土と考えられる版築状の土塊が認められた。今回の調査目的である外郭南辺区画施設を検出することはできなかったが、これにより、この周辺に築地塀が存在していた可能性が高いことを確認することができた。

4．ＳＫ601・602の他、同じく調査区西側で確認されたＳＫ603・604・621土壙については、埋土の特徴等からＳＫ601･602とほぼ同時期に掘り込み、埋め戻しがなされており、周辺にあったと推定される築地塀構築時の土取り穴と考えられるものである。

5．ＳＢ610掘立柱建物跡は、概ね伊治城期のものと推定され、柱穴規模が大きく、周辺には築地塀の存在が予想されることから、門や櫓となる可能性も考えられる。また、ＳＫ601・602埋土中に認められた版築状の土塊はＳＢ610構築時、築地塀の一部を取り払った際に、廃棄されたものである可能性が考えられる。

6．ＳＸ620整地地業は調査区中央のⅧ層上面で検出した。浅い沢地状部分における平坦面の造成地業と考えられる。地業の性格については道路跡等の施設である可能性も考えられるが、今回の調査では詳細を明らかにすることはできなかった。

【旧石器時代】

1．出土した石器はナイフ形石器１点、二次加工ある剥片１点、礫器１点、石核14点、剥片146点、砕片243点の合計406点である。剥片・砕片が全体の97%を占めており、二次加工が施された石器は黒曜石製のナイフ形石器など数点でトゥールの比率が非常に低い。

2．旧石器が出土した地点は、台地の東南端に位置し、すぐ南には迫川が東流している。標高は24.8 m～25.1 mで、北東方向へ緩やかに傾斜する地形になっている。石器はⅤ・Ⅵ層から出土

しており、主にⅥ層中に含まれる。平面分布を見ると南北約 7m、東西約 5m の範囲に集中する傾向が見られる。

3．器種組成において剥片・砕片が大部分を占めることと、接合資料が多く認められることから、この場は石器製作の場であったと考えられる。

4．接合資料、石核、剥片の特徴から復元できる剥片剥離作業は、素材に剥片と分割礫という違いはあるが、いずれの場合も剥離作業は素材に平坦打面を設け、打面再生、打面転移は行わず、打面、作業面を各一面に固定して進めている。出土した剥片は、やや縦長で不定形なものが主体を占めている。一方、この場から発見されないもの（持ち出されたもの）として、石核 X-11 から連続的に剥離されたある程度まとまった大きさの縦長剥片が想定できる。これらの剥片はこの場から出土した黒曜石製のナイフ形石器のように別の場所で石器として使用された可能性が高いと見られることから、この場で行われた剥片剥離作業の目的の 1 つが、ある程度の大きさを持つ縦長剥片の生産であったと考えられる。

5．石材は碧玉、玉髄・瑪瑙が主体で他に珪化凝灰岩、珪化木、凝灰質シルト岩、細粒珪質凝灰岩、鉄石英、珪質頁岩、黒曜石等と多種類のものが見られる。これまで当遺跡で確認されていた旧石器は、主に珪質頁岩であったが、今回の調査では同様の石材を用いたものは少なかった。黒曜石はナイフ形石器を含め 3 点出土しているが、全て母岩が異なり、砕片も出土していない。

6．石器群の編年的位置づけについては、基部加工のナイフ形石器の存在、調整技術を駆使した真正な石刃技法を有しない剥片剥離技術から、後期旧石器時代前半頃と考えられる。しかし、火山灰分析等の自然科学分析を行っていないため、詳細な年代的位置づけは今後の課題である。

引　用　・　参　考　文　献

後藤秀一 2000：「伊治城跡発掘調査の成果」『第 27 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』古代城柵官衙遺跡検討会 pp101 ～ 128
栗駒町教育委員会 1995：『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第 3 集
進藤秋輝 1991：「古代城柵の設置とその意義」『北からの視点』日本考古学協会 1991 年度宮城・仙台大会資料集 pp.　131 ～ 142
仙台市教育委員会 1985：『山田上ノ台遺跡 - 昭和 59 年度発掘調査報告書 -』仙台市文化財調査報告書第 77 集
仙台市教育委員会 1992：『富沢遺跡 - 第 30 次調査報告書第Ⅱ冊分 - 旧石器編』仙台市文化財調査報告書第 160 集
仙台市教育委員会 1995：『上ノ原山遺跡 - 国道 286 号線 (赤石工区) 改良工事関係発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第 198 集
仙台市教育委員会 2003：『山田上ノ台遺跡第 3 次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第 265 集
高清水町教育委員会 2000：『経ヶ崎遺跡　観音沢遺跡』高清水町文化財調査報告書第 2 集
築館町教育委員会 1988 ～ 2002：『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第 1 ～ 15 集
東北学院大学考古学研究部 1972：「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報」『温故』第 7 号
名取市教育委員会・宮城県病院局 2002：『野田山遺跡』名取市文化財調査報告書第 47 号
宮城県教育委員会 1978：「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和 52 年度分)』宮城県文化財調査報告書第 53 集 pp.　44 ～ 198
宮城県教育委員会 1980a：「原田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 63 集 pp.　409 ～ 423
宮城県教育委員会 1980b：「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 69 集 pp.　501 ～ 556
宮城県教育委員会 1980c：「大門遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 62 集 pp.　273 ～ 306
宮城県教育委員会 1980d：「佐野遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 63 集 pp.　425 ～ 546
宮城県教育委員会 1982：「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第 83 集 pp.　307 ～ 584
宮城県教育委員会 1983：「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第 93 集 pp.　289 ～ 546
宮城県教育委員会 1998：『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第 176 集
宮城県多賀城跡調査研究所 1978 ～ 1980：『伊治城跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 3 ～ 5 冊
栗原寺調査団 1963：「栗原寺の諸問題」『栗駒町史』追録第二 pp.　1135 ～ 1147

伊治城跡発掘調査報告書一覧

(1) 宮城県多賀城跡調査研究所 1978『伊治城跡 I 昭和52年度発掘調査報告』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊

(2) 宮城県多賀城跡調査研究所 1979『伊治城跡 II 昭和53年度発掘調査報告』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊

(3) 宮城県多賀城跡調査研究所 1980『伊治城跡 III 昭和54年度発掘調査報告』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊

(4) 築館町教育委員会 1988『伊治城跡 昭和62年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第1集

(5) 築館町教育委員会 1989『伊治城跡 昭和63年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第2集

(6) 築館町教育委員会 1990『伊治城跡 平成元年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第3集

(7) 築館町教育委員会 1991『伊治城跡 平成2年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第4集

(8) 築館町教育委員会 1992『伊治城跡 平成3年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第5集

(9) 築館町教育委員会 1993『伊治城跡 平成4年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第6集

(10) 築館町教育委員会 1994『伊治城跡 平成5年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第7集

(11) 築館町教育委員会 1995『伊治城跡 平成6年度発掘調概報』築館町文化財調査報告書第8集

(12) 築館町教育委員会 1996『伊治城跡 平成7年度:第22次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第9集

(13) 築館町教育委員会 1997『伊治城跡 平成8年度:第23次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第10集

(14) 築館町教育委員会 1998『伊治城跡 平成9年度:第24次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第11集

(15) 築館町教育委員会 1999『伊治城跡 平成10年度:第25次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第12集

(16) 築館町教育委員会 2000『伊治城跡 平成11年度:第26次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第13集

(17) 築館町教育委員会 2001『伊治城跡 平成12年度:第27次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第14集

(18) 築館町教育委員会 2002『伊治城跡 平成13年度:第28次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第15集

付表１　伊治城跡の発掘調査

◎多賀城跡調査研究所による調査

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文献
昭和51年度 (1976)	地形図測量（航空測量） 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①外郭北辺区画施設発掘調査	168 ㎡	7／4～8／3	大溝1、土塁1、土塁状遺構1	(1)
	外郭北部発掘調査	270 ㎡		焼失竪穴住居1、墨書土器「城厨」	
昭和53年度 (1978)	②外郭北部発掘調査	780 ㎡	7／3～8／4	掘立柱建物1、竪穴住居4	(2)
	外郭西辺区画施設電気探査		11／11～11／13		
昭和54年度 (1979)	③外郭北部発掘調査	1,000 ㎡	10／29～12／4	掘立柱建物2、竪穴住居17	(3)

◎築館町教育委員会・宮城県教育委員会による調査

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文献
昭和62年度 (1987)	1. 農道整備	220 ㎡	7／1～8／12	竪穴住居5（焼失1）	(4)
	2. 農協支所移転	150 ㎡	7／4～7／18	竪穴住居1	
	3. 個人住宅便槽取付	2 ㎡	8／5		
	4. 水道管埋設	1,250 ㎡	9／1～9／14	竪穴住居8	
	5. 農道整備	1,080 ㎡	1／18～2／9	竪穴住居7	
	6. 畜舎建築	80 ㎡	2／25		
昭和63年度 (1988)	7. 国庫補助事業	1,500 ㎡	7／1～10／30	内郭外溝、竪穴住居2	(5)
	8. 水道管埋設	142 ㎡	11／4～11／24	外郭東辺大溝？竪穴住居3	
	9. 農道整備	504 ㎡	2／6～2／12		
平成元年度 (1989)	10. 宅地現状変更	480 ㎡	4／11～6／1	掘立柱建物1、竪穴住居9、土器埋設1	(6)
	11. 国庫補助事業	1,200 ㎡	7／21～11／22	[内郭北西]区画施設・外溝、掘立柱建物3、竪穴住居10	
	12. 通学路整備	1,700 ㎡	9／5～9／16	外郭北辺大溝、古墳前期居館区画溝	
	13. 農道整備	1,960 ㎡	10／16～11／20	内郭区画施設・外溝、[政庁]正殿、北西建物	
	14. 水道管埋設	170 ㎡	11／29～12／8	竪穴住居？3	
平成2年度 (1990)	15. 国庫補助事業	900 ㎡	9／3～9／29	[内郭北西]掘立柱建物3、竪穴住居8	(7)
	16. 道路整備（大堀線）	1,320 ㎡	9／27～10／5	外郭東辺大溝？[外郭北部]竪穴住居16	
平成3年度 (1991)	17. 国庫補助事業	1,300 ㎡	5／27～7／16	[政庁]正殿・北殿・北西建物・北東建物・築地	(8)
	18. 個人住宅	300 ㎡	11／19～12／2	古墳前期居館	
平成4年度 (1992)	19. 国庫補助事業	1,300 ㎡	5／11～7／4	[政庁]正殿・前殿・西脇殿・目隠塀・南門・築地 [内郭南西]築地？掘立柱建物2、竪穴住居1	(9)
平成5年度 (1993)	20. 国庫補助事業	1,500 ㎡	10／4～11／18	[内郭南西]築地？掘立柱建物5、竪穴住居2 [内郭南東隅]区画施設・外溝、掘立柱建物1、竪穴住居5 [外郭南東]掘立柱建物2、竪穴住居7、溝	(10)
平成6年度 (1994)	21. 国庫補助事業	820 ㎡	10／3～11／27	[内郭北部]区画施設、掘立柱建物1、竪穴住居9 [内郭南西]掘立柱建物5、竪穴住居3	(11)
平成7年度 (1995)	22. 国庫補助事業	1,140 ㎡	10／5～11／14	[内郭北部] 掘立柱建物1 [外郭南西端]外郭区画施設・大溝、掘立柱建物1 [外郭南西外側] 掘立柱建物3	(12)
平成8年度 (1996)	23. 国庫補助事業	450 ㎡	10／7～11／7	[外郭西辺]区画施設・大溝 [外郭西端]掘立柱列1、竪穴住居1	(13)
平成9年度 (1997)	24. 国庫補助事業	480 ㎡	10／6～11／7	[外郭北辺]土塁、大溝、竪穴住居1	(14)
平成10年度 (1998)	25. 国庫補助事業	450 ㎡	10／23～11／13	[外郭東辺]区画施設、大溝 [外郭南東] 掘立柱建物2、竪穴住居8	(15)
平成11年度 (1999)	26. 国庫補助事業	200 ㎡	11／8～11／22	[内郭南東端]区画施設、大溝 [外郭南東]竪穴住居12、弩「機」報告	(16)
平成12年度 (2000)	27. 国庫補助事業	500 ㎡	10／16～11／8	[外郭南端部]掘立柱建物13	(17)
平成13年度 (2001)	28. 国庫補助事業	400 ㎡	11／5～11／15	[外郭南西部]掘立柱建物7、竪穴建物1、竪穴住居2	(18)
平成15年度 (2003)	29. 国庫補助事業	500 ㎡	10／3～11／6	[外郭南辺部]掘立柱建物6、旧石器	本書

付表２　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和　　暦	記　　事	文　　献
767	神護景雲 1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位、外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる	続日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる 2. 桃生・伊治に板東８国の百姓を募り安置しようとする 6. 栗原郡を置く。これはもと伊治城である （「続日本紀では神護景雲元年 11 月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲３年６月９日乙巳説をとる）	続日本紀 続日本紀 続日本紀 続日本紀
780	宝　　亀 11	6. 浮宕の百姓 2,500 人を伊治城に遷す 3. 上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する	続日本紀 類聚国史巻 190
792	延　　暦 11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げられて果たせないでいることを訴える	日本後紀
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に１駅を置く 11. 相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民 9,000 人を伊治城に遷し置く	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に３駅を置く	続日本後紀
837	承　　和 4	4. ３年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し、栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵 1,000 人を差発して非常に備える	
905 （着手）	延　　喜 5	延喜式○神名式　陸奥国 100 座 栗原郡７座　大１座　表刀神社 小６座　志波姫神社 雄悦神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社　遠流志別石神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造、栗原、磐井……　各５疋	和名類聚抄
931 ～ 938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	

報告書抄録

ふりがな	いじじょうあと
書名	伊治城跡
副書名	平成15年度伊治城跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	築館町文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	佐藤　憲幸・千葉　長彦・三浦　実
編集機関	築館町教育委員会
所在地	〒987-2293　宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7番1号TEL0228－22－1125
発行年月日	西暦　2004年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伊治城跡（いじじょうあと）	宮城県（みやぎけん） 栗原郡（くりはらぐん） 築館町（つきだてちょう） 字城生野（あざじょうの）	045217	41007	38度 45分 50秒	141度 02分 40秒	20031003 ～ 20031106	500	重要遺跡 範囲確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊治城跡	城柵跡	旧石器時代 古墳時代 奈良～ 平安時代	掘立柱建物跡 土取りによる溝状遺構	土師器　須恵器 平瓦　丸瓦 旧石器	内郭南辺周辺で建物跡と外郭南辺部において外郭南門跡を発見した。 旧石器時代の石器製作場を発見した。

築館町文化財調査報告書　第17集

伊　治　城　跡

印　刷　　平成16年3月25日
発　行　　平成16年3月30日

発　行　　築館町教育委員会
〒987-2293
宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7番1号
TEL 0228-22-1125

印　刷　　南部屋印刷株式会社
宮城県栗原郡築館町高田一丁目7番36号